

NGOスタッフのための国内／海外研修 報告書



2006年度

独立行政法人国際協力機構

JICA地球ひろば

地球ひ

J R

08-2

NGOスタッフのための国内／海外研修 報告書

2006年度

独立行政法人国際協力機構

JICA地球ひろば

* 本報告書は研修参加者が分担して執筆したものです。

執筆担当者は担当箇所ごとに記載しています。

なお、各記載内容が独立行政法人国際協力機構の見解を代表するものではありません。

ごあいさつ

「NGO スタッフのための国内／海外研修」は 2001 年度から開催され、今回で 6 回目となります。JICA では、NGO や地方自治体とのかかわりの中で 1997 年度から開発福祉支援、1998 年度から開発パートナー事業、2000 年度から小規模開発パートナー事業を開始し、2002 年度はこれら事業の発展的再編を行い「草の根技術協力事業」を開始しました。この間、NGO と JICA の間では協働の実績や経験も蓄積され、それらを巡る状況も変化してきました。

今回の研修ではこれら状況を踏まえ、国内での事例分析、海外の活動現場のフィールドワークをとおして、①よりよい「NGO と JICA の連携のあり方」を提案すること、②NGO の事業運営を適切に行なうために必要なヒントを得ることを主な目的としました。

また、草の根技術協力事業を実施している NGO のプロジェクト担当者や JICA 現地事務所の活動を通じて現場における NGO と JICA の関係を理解し、よりよい関係について考察を深めていただくことによって、お互いの長所を生かしたプロジェクトが形成されていくことを期待してこの研修を実施しております。

今回の研修には 7 名の参加者が集い、各々の参加者が他の NGO プロジェクトの運営管理手法や理念、JICA 草の根技術協力への取り組みの事例を実際に確認、同じ国際協力に携わる仲間として大いに刺激を受けたのではないかと思います。

最後に、本研修の開催にあたってお忙しいなかご協力を頂きました（特活）ソムニードの皆様
に深く感謝いたします。

独立行政法人 国際協力機構
JICA 地球ひろば 所長 草野 孝久

目 次

ごあいさつ

第1章 研修概要

1 目的	3
2 研修期間	3
3 実施概要	3
4 実施体制	3
5 研修参加者	4
6 研修日程	5
7 現地調査の受け入れ団体	6
8 研修の様子	7

第2章 研修の記録

2-1 国内事前研修	11
2-2 海外現地研修	15
2-2-1 オリエンテーション	15
2-2-2 ソムニード代表理事和田信明氏のセッション	16
2-2-3 ソムニードスタッフのインタビュー	18
2-2-4 SHG 訪問	23
2-2-5 VVK プレゼンテーション	31
2-2-6 研修生チームプレゼンテーション	34
2-2-7 ソムニードへのフィードバックとソムニード事務所訪問	37
2-3 JICA 事務所	40
2-3-1 JICA インド事務所での振り返りセッション	40
2-3-2 JICA 事務所フィードバック	42
2-4 帰国後国内研修『和田語録』	46
2-5 研修の感想と自分の今後の仕事に生かせること	48

第3章 コースリーダーとソムニードからのメッセージ

3-1 コースリーダーからのメッセージ	59
3-2 ソムニード国内事務所からのメッセージ	61
3-3 ソムニード・インドからのメッセージ	62

第4章 研修の資料

1 海外研修報告発表資料	67
2 アンケートまとめ	73

研修の概要



サリーを着せてもらった女性陣

第1章 研修概要

1 目的

今回の研修は、次の2つの目的をもって行われた。

国内での事例分析、海外の活動現場のフィールドワークをつうじ、

- ① よりよい「NGOとJICAの連携のあり方」を提案すること
- ② NGOの事業運営を適切に行なうために必要なヒントを得ること

2 研修期間

2007年3月25日（日）から4月7日（土）まで

（うち国内研修は3月25、26日および4月6、7日、海外研修が3月25日～4月6日）

3 実施概要

本研修は、国内研修と海外研修から構成され、事前の国内研修（2日間）では、オリエンテーションとワークショップ（テーマに関する課題共有等）の後、（特活）ソムニードの概要と国内での活動の取り組み、海外研修の視察先プロジェクトに関する説明等を受けた。

海外研修では、インド・アンドラプラデシュ州ビジャカパトナムにおいて、JICA草の根技術協力事業を実施している日本のNGO（ソムニード）のプロジェクトとその活動現場を視察・調査し、プロジェクトの到達点や課題、これまで直面した問題点とその解決方法などについて現場の生の声から学んだ。プロジェクト現地調査の際には、グループに分かれて住民グループやソムニードスタッフへのインタビューと現場訪問を行った他、住民グループの連合体からのレクチャーも受けた。持ち帰った情報をグループ間で意見交換するとともに、住民グループやソムニードへもフィードバックとする議論を行うことによって、活動の成果をより深く理解することができた。なお、JICAインド事務所においては、インドにおける政府開発援助（ODA）の現状、日本のNGOに対する期待などについて所長からの説明を受けた他、ビジャカパトナムでの現地調査後には学んだことの報告も行った。

帰国後の国内研修では、ソムニード代表から再度お話しを聞くとともに、調査内容を整理した。帰国報告会では参加者が自主的にその内容と発表方法を考え、パワーポイントでのプレゼンテーションに加えて寸劇などを交え研修で得られた成果を発表した。

4 実施体制

研修内容の検討および実施にあたっては、コースリーダーを務めた「いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク（あいあいネット）」の長畑誠さん、およびJICA地球ひろば企画グループが中心となり、受け入れ先のソムニードとも討議・調整を行いながら進めた。

また、海外研修にはJICAインド事務所のNGO連携事業担当者が同行した。

5 研修参加者（五十音順）

No.	氏名	所属先
1	芦澤 弘子 Ms. ASHIZAWA Hiroko	(特活) エコ・コミュニケーションセンター Eco Communication Center
2	石井 利佳 Ms. ISHII Rika	ユニセフ三重友の会 (特活) みえ青少年ボランティアネットワーク Center for Citizen Initiatives- Mie
3	伊藤 文 Ms. ITO Fumi	(特活) アジア太平洋資料センター (PARC) Pacific Asia Resource Center
4	上村 眞由 Mr. UEMURA Masayoshi	(特活) 日本ミャンマー友情の架け橋 (JAMBOF) Japan And Myanmar Bridge Of Friendship
5	加藤 伸也 Mr. KATO Shinya	(特活) インド福祉村協会 India Welfare Village Society
6	日置 雅夫 Mr. HIOKI Masao	(特活) タランガ・フレンドシップ・グループ Taranga Friendship Group
7	山田 理恵 Ms. YAMADA Rie	いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク (あいあいネット) i-i-net (iriai-yoriai network) Research & Action For Community Governance

運営実施

1	コース・リーダー Course Leader	いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク (あいあいネット) i-i-net (iriai-yoriai network) Research & Action For Community Governance
	長畑 誠 Mr. NAGAHATA Makoto	
2	事務局 Secretariat	JICA 地球ひろば 企画グループ 企画チーム JICA Global Plaza
	稲生 俊貴 Mr. INAO Toshitaka	
3	補佐 Accompanying Assistant	JICA インド事務所 JICA INDIA Office
	佐々木 結 Ms. SASAKI Yu	

6 研修日程

Date	Day	Place	Subject	Lodging
3/25	Sun	Tokyo	13:30 住民主体の活動概念整理 (ワークショップ) Workshop	JICA Global Plaza
3/26	Mon	Tokyo	09:30 現地調査対象案件研究 (講義) Lecture	JICA Global Plaza
3/27	Tue	in flight	Narita (14:40) → Delhi (19:55) JL 471	Delhi
3/28	Wed	New Delhi	09:30 Meeting with the staff of JICA India office (JICA インド事務所との打合せ) <ul style="list-style-type: none"> ・ Security Briefing (安全対策ブリーフィング) ・ Briefing about community based cooperation program in India (インドにおける住民主体の協力の概要) ・ Briefing about NGO-JICA desk in India (NGO-JICA デスクの概要) 14:30 Workshop (ワークショップ)	Delhi
3/29	Thu	in flight	Delhi (10:30) → Visakhapatnam (13:30) IC7477 15:00 Orientation (オリエンテーション)	Visakhapatnam
3/30	Fri	Visakhapatnam	09:30 Lecture and Workshop (講義、ワークショップ) 14:30 Workshop (ワークショップ)	Visakhapatnam
3/31	Sat	Visakhapatnam	09:30 Field visit (サイト訪問・意見交換) 14:30 Workshop by VVK representatives (VVK 代表者とのワークショップ)	Visakhapatnam
4/1	Sun	Visakhapatnam	09:30 Preparation for the presentation (ワークショップ)	Visakhapatnam
4/2	Mon	Visakhapatnam	09:30 Feed back session with VVK members (VVK 代表者との協議) 14:30 Winding up session (ワークショップ)	Visakhapatnam
4/3	Tue	in flight	Visakhapatnam (11:35) → Delhi (14:35) IC7478	Delhi
4/4	Wed	New Delhi	10:00 Preparation for reporting to JICA India Office (インド事務所への報告準備) 15:00 Report to JICA	Delhi
4/5	Thu	in flight	10:30 自由行動 free action Delhi (21:40) → Narita (09:25+1) JL 472	Flying overnight
4/6	Fri	Tokyo	09:25 成田着 →12:00 地球ひろば着 17:00 Workshop (ワークショップ) <ul style="list-style-type: none"> ・ 海外研修まとめ ・ 海外研修報告会準備 	JICA Global Plaza
4/7	Sat	Tokyo	10:00 海外研修まとめ、ソムニードとの意見交換 (ワークショップ) Workshop 13:00 研修報告会 16:00 終了	JICA Global Plaza

: 海外研修

7 現地調査の受け入れ団体

特定非営利活動法人 ソムニード

(ソムニード情報センター/事務局)

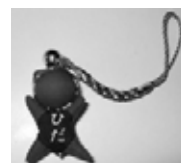
〒506-0032 岐阜県高山市千島町 900-1 飛騨・世界生活文化センター内

TEL : 0577-33-4097 (代) FAX : 0577-36-5471 Email : info@somneed.org

<http://www.somneed.org/>



飛騨・世界生活文化センター



8 研修の様子

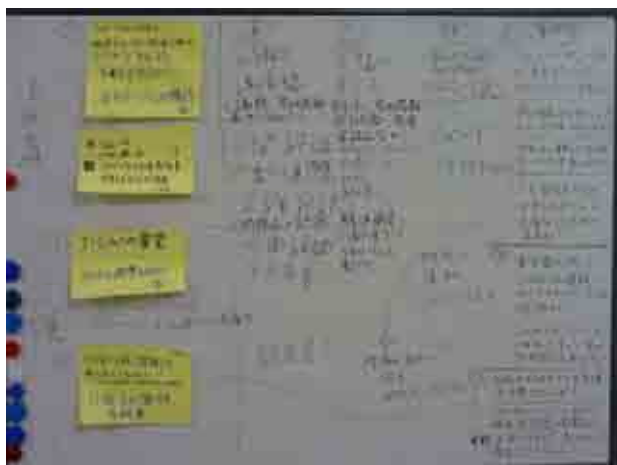
【東京】



講義



ワークショップ



【ビジャカパトナム】



VVK 事務所でのオリエンテーション



現地訪問・インタビュー



居住地(カーペンターズ・コロニー)



VVK のプレゼンテーション



VVK へのプレゼンテーション



ソムニード事務所訪問

【デリー】



JICA 事務所報告会



研修の記録



ビシャカパトナム夕景

*この章は研修参加者が話し合いながら作ったものです。

各パートごとに担当者が文章を作り、参加者全員がコメントを出しながら作成しました。

(編集：日置)

第2章 研修の記録

2-1 国内事前研修

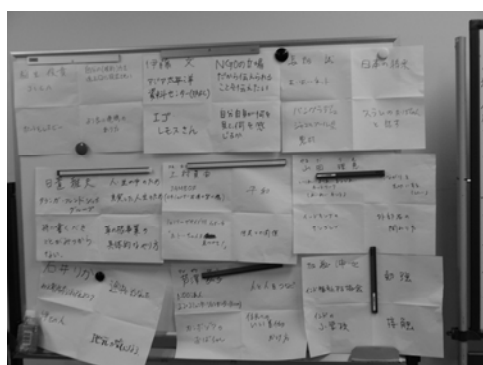
(担当：長畑)

3月25日(日)～3月26日(月)

JICA 地球ひろばにて

1. 参加者の自己紹介

2人一組になり、それぞれが「名前と所属団体名」「なぜNGOに関わったのか」「今までに一番印象に残った『途上国』のモノ／ヒト／場所は？」「この研修で学びたいこと」の4点について、相手に説明。ペアの相手がそれをみんなに紹介しました。



2. この研修の基本的な考え方について

コースリーダーから、「受け身でなく、自ら積極的に調べ、学んでほしい」という点が強調されるとともに、「今回の中心はあくまで現場、つまりビジャカパトナムのスラムで活動するソムニードと Self Helping Group (SHG) のオバチャンたちからいかに学ぶか、が肝である」ことが述べられました。

3. 「住民主体の開発」についての話し合い

研修テーマである「住民主体の開発」について、次の2つの視点から議論されました。

(1) 「ヒトが主体となるとは？」

これまでの人生のなかで、自分が関係した相手が「主体的に動いた」と感じた事例をピックアップして、「それは何がきっかけだったのか」を考え、シェア。

(2) 「知っていること・知らないこと」のマトリクス

コミュニティの人たちが知っていること／知らないこと、外部者（NGO等）が知っていること／知らないこと、というカテゴリーでマトリクスを作り、その中身を議論（下図参照）。そこから、コミュニティになぜ外部者が関わるのか、についての考え方を整理。

	外部者が知っていること	外部者が知らないこと
コミュニティが知っていること		
コミュニティが知らないこと		

4. 「連携」についての話し合い

研修目的の一つである「NGOとJICAの望ましい連携のあり方」を考えるにあたり、「連携」に関して、次の課題を通して意見を出しあい、考えを共有しました。

「小学校に行ける子どもがあまりいない農村で、初等教育の充実のためにコミュニティ・NGO・公的機関は何ができるか」

	単独でやること	連携してやること
コミュニティがやるべきこと		
NGOがやるべきこと		
公的機関がやるべきこと		

5. ソムニードの活動について

ソムニード事務局長の竹内ゆみ子氏から、次のような内容のお話を聞きました。

<行政との連携について>

ソムニードと（高山の）地方行政との連携の必要性は、住民に対する信頼獲得のためであったことを、団体の設立からの経緯と、事務局が地方にあったことと関係しているのではないかという視点で紹介。岐阜県との関係も同じであり、住民に対しては信頼獲得。また、先駆的な活動に対しては、住民よりも行政の担当者の方が、理解は早く、そのことによって、資金的な協力も得やすい。



JICA との連携も、同じように考えている。しかし、当初は、JICA 中部から後援名義を借りるだけでも大変だった。また田舎にある NGO の使命として、都会に対する地方と先進国に対する途上国の関係と似ているところがあるので、その関係性を伝えていくことを強く感じている。

<ソムニードにおける海外事業と国内事業>

海外事業と国内事業を同等の関係で考えている。国内事業というのは、海外事業のいわゆる広報ではなくて、事務局のある地域のまちづくりそのものであること。海外での事業も実は、その地域での地域づくりと位置づけている。そういう意味では、インドでも日本でもやっていることは、共通の地域課題を解決することであると捉えている。

<なぜ地域で活動するのか>

第一の理由は、ソムニードが高山に事務局本部のある田舎の NGO だったからである。それは国際協力活動を話せばわかる学生もいない、資金も少ないということ。ないないづくしで活動を理解してもらうには、信頼獲得以外にないこと。また都会に対する田舎の状況は、先進国に対する途上国の状況と似ていることを自覚したこと。東京や名古屋など大都市に住む人々の生活常識が田舎の生活常識と基本的なところで違うこと。

私自身が、特に意識するようになったのは、インドのある村で村長さんが問いかけたことがきっかけであった。

「先進国から来たあなた方に訪ねたいことがある。どうしたらいいか教えて欲しい。子供たちを幸せにしたいと思ひ、無理をして教育を受けさせる。しかし、学校へ行くと村へ帰ってこない。帰ってきてもそれを活かす仕事がない。どうしたらいいだろう。」そのとき、居合わせたツアーメンバーは、誰一人こたえることができなかった。この言葉が胸に突き刺さっている。

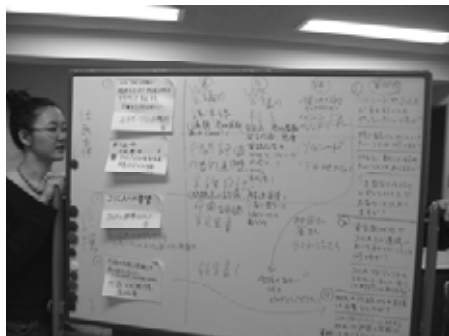
6. 現場でどのような調査をするか、についての話し合い

これまでの話し合いを受けて、各参加者が「スラムのオバチャンたち」「ソムニードの人たち」「その他の人たち」から、何を知りたいか、をまずリストアップ。それを「住民主体の開発に関すること」「連携に関すること」に分け、そこからいくつか重要と思われる点を取りあげ、それぞれについて、「資料等からわかること」「観察してわかること」「実際に質問してわかること」は何か、を考えました。また、「相手にインタビ

ューする」 する場合にはどのような質問方法があり得るか、についても話し合いました。

7. 研修風景

(担当：加藤)



課題発表をする研修生

長畑コースリーダーから「住民主体とは何か」、「行政との連携とは何か」、「事業のモニタリング、評価のあり方」等々について、概念整理の話があり、研修員同士の対話と議論で理解を深める内容でした。

また、国内で活動するソムニード所属の竹内氏から、高山での活動経歴や「住民の理解を得る」ことの困難さと、それを克服することについて問題提起されました。どこで活動しようとも、まず住民の理解と協力、そして、行政を含む各団体との連携、地域に密着した活動がもっとも効果的であることの示唆がありました。

国内研修で感じたことは、政治であれ、国際支援を続ける、JICA、NGO であれ、改めて、「どこであろうが、そこで住む人たちの考えや意見、気持ちを大事にする」ことであると感じました。それは、日本が古来から継承している「入会権、ゆい^注、祭事」等々が大いに参考になると感じました。要するに、「互助組織」の存続が日本では薄れているが、温故知新的に新たな組織も、その時々に合わせて生まれていると感じます。

編集部注) ゆい：昭和三十年頃までの農村部において農作業時に人々が相互に労力を分かち合い、助け合う精神。

2-2 海外現地研修

2-2-1 オリエンテーション (担当：加藤、伊藤、日置)

喋れな
いわ？



黄門様ならぬ和田さん

SHG と VVK の人たちに話を聞くときに、我々研修生同士でも使用してはいけない、「23の禁止用語」が提示されました。その用語とは、次のとおりです。

・貧困	・弱者	・エンパワーメント
・持続的開発	・幸せ／不幸せ	・満足／不満
・マイクロ・クレジット	・マイクロ・ファイナンス	・NGO と JICA との連携
・住民参加型	・住民主体	・モニタリング、評価
・貧困ライン	・受益者	・P R A
・コミュニティ開発	・意識化 (awareness building)	
・貧困削減	・ジェンダー	・女性の自立
・開発援助、開発支援	・草の根	

こうした開発用語が禁止用語となり、研修生にとってはかなりのショックでした。

※VVK とは、Visakha Vanitha Kranthi=ビシャカ・ワニタ・克蘭ティの略。ビシャカパトナム市内及び近郊の 35 の SHG からなる連合体。SHG とは、Self Help Group=セルフ・ヘルプ・グループの略。貯蓄と貸付を行う 10～20 名で組織されるグループ。

2-2-2 ソムニード代表理事和田信明氏のセッション

(担当：加藤、伊藤、日置)

1. インド国内での実地研修に当たって

インドでの研修を基盤として、インドで実際に活動を続けるソムニードの「都市近郊農村部の女性自助グループと都市スラムの女性自助グループの連携による新たな産直運動構築と自立のための共有財産創出」について実地研修を行いました。

最初に、和田氏から質問がありそれに研修生が答える形で講義が進みました。その質問は以下の「4つのカテゴリー」でした。

- 1) スラムの一人を想像し、その生活を具体的に書くこと。
- 2) ビシャカパトナムの飛行場からホテルまでの間に見た人々の職業は何か。
- 3) スラムのファミリーが使う物は何か（人、組織、家具、道具等々）。
- 4) 2で思いついた職業で、スラムのファミリーが働いていると考えられる職業は何か。

次の質問は、「個人として、金もない、背後に背負っているものもない」ことを思い浮かべつつ、次の内容で研修生は考えよ、と言うことでした。

- 1) この人達となにをしたいか。
- 2) 何故、こんな事をインドでするのか。

その上で、和田氏が研修生に伝えたことは下記の内容が NGO 活動の前提条件でした。

- 1) 現地を観察せよ。
- 2) 現地の人は、なにを思っているか。
- 3) その上で、自分はなにが出来るか。

さらに、和田氏がサゼスチョンしたことは次のとおりです。

- 1) 「鴨がネギを持ってきた」訳ではないことを徹底して現地の人々に教えたこと。
- 2) 「行き当たりばったり」でやることが、方向性を決める。

方向性とは、「2、300年で人はどう変わるか不明である」、「数百年で近代国家と村の関係がどうなるか。」

この方向性に至ったきっかけは、「ある一人の人間が、昔と違って近所の人と会話をしなくなったのは何故か」という問いであったとの話でした。

- 3) 自分の歴史を土台にし、他の足を違うところに置くこと。
- 4) ここにない物を使おうとしないこと。
- 5) いろんな苦情・要求があっても、受け入れてやってあげるのではなく、問いつめること。何時からないのか、何がしたいのか等々。

2. 現地で研修するに当たっての基礎資料の再確認

(PCUR-LINK 便りから抜粋・・・ソムニードの方針等々)

(1) 事業の成果目標

- 1) SHG の企画・運営能力の向上
- 2) 生産者と消費者の新たな関係の構築
- 3) 生産・物流センターを郊外に建設し、対象グループの収入向上と共有資産の創出

(2) 事業推進のための研修計画

- 1年目 SHG と NGO スタッフの SHG 企画・運営能力の向上の研修
- 2年目 センターの計画及び運営委員会に選抜された SHG スタッフを中心に、継続する会計管理研修に加え、センター運営や商品開発の研修

3年目

(3) 事業推進の基本的方針

- 1) コンセプトとは
当事者が共通の地図を持ち、目的地に向かうこと。
- 2) SHG は貧しいのではない。彼らにはキャッシュフローが常時不足しており、会社、政府と言った組織を持たないため、組織力がない。
- 3) 貧困とは、社会構造が作り出した富の不平等な分配であり、この不平等な分配体制に立ち向かうため、また代替案を提示するための組織として SHG が必要。

(4) 事業に参加する SHG 参加指針

- 1) 事業を理解し、自ら事業を実施してゆこうとする気のある SHG を対象とする。
- 2) センターの建設を行い、かつその維持管理と商品開発を持続的に手がけていく能力を持った SHG を対象とする。

(5) 事業推進に協力を得た他の団体組織

- ・ NGO 「CFDA」 のジャヤチャンドラン氏
- ・ アクシャヤ銀行 (CFDA が設立した銀行)
- ・ NGO 「マヒラアクション」



<コラム:インドこぼれ話> (石井)

・インドの女性は大変オシャレで、手や足にメヘンディをします。メヘンディは、ヘナ(草)から出来たペーストを手間と時間を掛けてレース編みの模様のような、細かい独特の模様を描いていきます。茶色のヘナペーストは2時間くらいで乾いてポロポロとはがれてきて、オレンジ色に染まります。またヘナはヘアコンディショナーとしても使え、染髪効果もあります。

・ヒンドゥー教の既婚女性はシンドゥールをつけます。シンドゥールは、赤い色粉で髪の毛の前の方の分け目に色をつけます。また足の人差し指にリングをはめます。結婚のお祝いに、きれいな入れ物に入ったシンドゥールをもらったりするそうです。

・インドでは、幸せになった人が振る舞いをします。私たちも、ソムニード・インドのメンバーが新築したお祝いに甘〜いお菓子をご馳走になりました。

・インドで辛いものを食べるのは、アーユルベーダの伝統的な考え方からです。暑い時に冷たいものを食べるのではなく、暑い時こそ、温かいものや辛いものを取り、自分の身体が自分で体温調整する力を出させるのです。北インド料理よりも南インド料理の方が「チリ」を使う量が多く、ココナッツを頻繁に使うのもアーユルベーダの教えです。

・インドにも台所の知恵袋があります。食後には、クローブをそのまま含んでください。お口すっきり、歯はツルツルです。虫歯には挟むと歯痛止めになります。消化不良を癒すには、お湯にクミンシードとはちみつを入れて食後に飲んでください。喉が痛い時は、温かい牛乳にターメリックとブラックペッパーを少し入れて飲んでください。胃腸の鎮静には、ラッシーが効果的です。ラッシーは、人肌に温めた牛乳2/3にヨーグルト1/3と砂糖または塩を加えてよく混ぜ合わせます。

2-2-3 ソムニードスタッフのインタビュー

3月30日(金) 午後

VVK事務所にて

グループA (イシュワリさん、研修生)

グループB (ラマラジュさん、ラトナさん、研修生)

1. グループA

(担当: 伊藤、芦澤、石井、山田)

参加者: ソムニード・インドのスタッフ

イシュワリ (女性、帳簿の管理・コンピューター入力・研修の補助など)

通訳 原 康子 (プロジェクトマネージャー)

研修生 石井利佳、山田理恵、芦澤弘子、伊藤 文



ソムニード・インドのスタッフを囲んで

2007年3月にソムニードのスタッフになったばかりというイシュワリさんにお話を伺いました。イシュワリさんは、もともとはマヒラアクションというNGOのスタッフとして、ビジャカパトナムのSHGのオバチャンたちのローンの管理を行っていましたが、2004年、PCUR-Linkプロジェクトが開始されるとともに、マヒラアクションの中でもソムニードのプロジェクト担当として、SHGに関わるようになりました。SHG活動の評価項目作りやモニタリング、帳簿付けやコンピューターの使い方などを、プロジェクト開始以降、和田さんをはじめとしたソムニードのスタッフに習ったということです。

マヒラアクションだけでSHGに関わっていた頃と、現在とでは、仕事の大変さややりがい格段に違う、とイシュワリさんは言います。マヒラアクションの頃は、団体に計画性がなく、今自分がしていることが何につながるのか、次に何をすればいいのかが見えず、仕事がやりづらかったそうです。

イシュワリさんが担当しているSHGすべての帳簿をつけ、マヒラアクションの団体長に提出するのも彼女の仕事。帳簿の計算が合わないと、一日の仕事をやり終えた後、夜に自分の家で帳尻あわせをすることもよくありました。オバチャンたちのためにローンを銀行からとってきてあげるのがNGOの役割で、時には自分でお金を返せない人のためにイシュワリさん本人がお金を出して代わりに返したり、ローン申請にかかる代金の肩代わりをしたりなどということもしていたそうです。

60のSHGを担当し、一日5つから6つのグループを回っていた、というイシュワリさん。管理しなければいけない帳簿の量は膨大だっただろう、と私たちも彼女の仕事の大変さを想像しました。

PCUR-Linkプロジェクトは、プランニング・トレーニング・プラクティスが誰の目にも分かりやすく、役割分担もきちんとしているところが魅力、また、仕事をおもしろく感じることができる、とイシュワリさんは、ソムニードのプロジェクトに関わるようになった後の変化を語ります。

プロジェクトの始まった 2004 年からは、帳簿の付けかたをオバチャンたちに教えたり、チェックしたりすることが彼女の仕事になりました。それと同時に、活動のレポートをコンピューターで作成し、管理する仕事もしていたそうです。帳簿付けを、ずっと自分自身の手で行ってきたため、オバチャンたちに教え始めてから 3 か月ぐらいは、これは本来自分の仕事なのではないか、と戸惑いを覚えたそう。それでも、その間にオバチャンたちはどんどんと色々なことを自分たちでできるようになり、イシュワリさんも、自分ですることは、と思えるようになったと言います。

今は、帳簿の付けかたをオバチャンたちに教える担当のトレーナーもできたので、イシュワリさんは、その手助けをする役割にまわっています。自分が担当する SHG の帳簿をすべて自分でつけていた数年間に比べて、作業が格段に楽になったと、イシュワリさんは話していました。

マヒラアクションスタッフとして SHG をまわっていた頃、彼女たちのことを助けてあげているつもりになっていながらも、SHG のオバチャンに「あなたは私たちが仕事を頼んだりお金を借りたりするから食べていけるのでしょ」と言われたこともあったそうです。オバチャンたちと、マヒラアクションのスタッフの依存関係は、当たり前のことのようになっていました。

特にイシュワリさんは、SHG の女性たちが住むスラムと同じような環境に住んでいて、オバチャンたちからしてみても、小言を言いやすい立場で、そのような発言にも耐えながらの仕事だったようです。ソムニードのスタッフからは、そんなことを言う SHG には行かなくてよい、自分から説明をする必要はない、と言われ、そのように頼ってくるオバチャンたちにはなるべく関わらないようにして、グループの自立を進めていったそうです。

辞めたい
と思った
ことはな
かったの
ですか？



マヒラの時は大変
だったけど、ソム
ニードはやりがい
があるわ

仕事がとても大変で、やりがいも感じられなかったというマヒラアクションの頃、やめたいと思ったことはなかったのですか、という私たちからの質問に対しては、家計を支えるためには仕事が必要だったので、やめることはできなかったとの答。自分で帳簿を抱え

ていた時は、家に持ち帰る仕事も多く、家族も彼女に対してつらくあたっていたようですが、現在は、理解を得られていて、それもよかったことのひとつだと話していました。

ソムニードの PCUR-Link プロジェクトが終了する 2007 年 6 月以降は、現在の事務所の受付がイシュワリさんの主な仕事になるそうです。今は英語を勉強中で、電話の対応を英語でできるようになりたいとのこと。将来は、日本語でも電話に出られるようになるかもねと、ソムニードスタッフの原さんと笑顔で話していました。

マヒラアクションからソムニードに移ったイシュワリさんに、ソムニードの信頼できる場所はどんなところですか、と聞いてみたところ、計画性があるところと、次々と課題をこなす中で自分自身が成長してゆけると感じられるところ、という答が返ってきました。現在勉強中の英語も、それを使って受付の仕事をこなしてゆけるようになることが楽しみで、楽しみながら勉強している、とのことでした。

2. グループ B

(担当：加藤、日置)

参加者：ソムニード・インドのスタッフ

ラマラジュ（男性、VVK のマネージメントをファシリテート、
英語とテルグ語の通訳）

ラトナ（女性、お金や視察等のコンピューター入力・管理）

通訳 前川香子（アシスタント・プロジェクトマネージャー）

研修生 加藤伸也、日置雅夫

JICA 稲生俊貴、佐々木結



ソムニード・インドのスタッフを囲んで

(1) ラマラジュさんとラトナさん

ラマラジュさんは 2003 年にマヒラアクションからソムニードのスタッフになり、2004 年 7 月からプロジェクトに参加しています。VVK のマネージメントのファシリテートを行っており、英語とテルグ語の通訳も行っている。

当初は、マヒラアクションとソムニードが VVK の活動に対し、週 1 回程度のチェックを行っていたが、今は VVK が単独で行っている。

また、VVK 自らが約 1 年かけて登録を行った。ソムニード・インドは補助的支援行った。会則に関しての案も出さなかった。

ラトナさんはプロジェクトにマヒラアクションのスタッフとして参加し、5 日前に VVK のスタッフになったばかりです。主な仕事はお金や視察等のコンピューター入力や管理です。マヒラアクションのスタッフは当初 6 人いましたが、5 人に減り、3 人にまで減りました。マヒラアクションは別事業をはじめ、人を減らしました。ラトナさんは、このままこの仕事をやりたいと思い、ソムニードのスタッフになりました。

(2) 指導員の研修について

過去 2 回指導員の研修を行ったが失敗した。3 回目にして、何とか成功した。指導員の養成のため 9 人を集めたが、研修の経過とともに、7 人に減り、5 人に減り、4 人にまで減ってしまった。現在このうちの 2 人が指導を行っている。一人は 8 グループを、もう一人は 1 グループを担当している。この 2 人の指導員を見て、14 人の人が指導員になりたいと申し出ている。現在の指導員が指導して育てる予定。なお、指導員としての認定書はソムニード・インドが作成し、渡している。

指導員の育成では、ファシリテートしているところをビデオにとり、ビデオを見ながら意見交換をした。そのうち、何人かが止めていった。

(3) お金について

通常お金が支払われてからプロジェクトが始まる。しかし、和田さんからお金がなくてもできるといわれた。7、8 ヶ月経ってから、1 銭もお金を上げなくてもできることを知った。

VVK の維持費についても徐々に VVK 自身が負担するようになってきている。たとえば、電話代等。

(4) これから特に何をしたいか

ラマラジュさんは、次にとおりのことを言いました。

「ソムニードの基本方針に、①経済的發展、②環境、③コミュニティ開発があります。これから、森や水などの共有資源を有効利用することでコミュニティ開発をしたいです。」

ラトナさんは次のとおりのことを言いました。

「ソムニードにはいって間がないため、ソムニードの活動について学びたいです。」



2-2-4 SHG 訪問

3月31日(土) 午前：スラムの人たちの自宅及び集会所にて

1. グループ A

(担当：芦澤、山田)

研修生：山田理恵、芦澤弘子（欠席：上村真由）＋長畑誠

JICA：佐々木結

ソムニード：ラマラジュ、ラトナ、前川香子

訪問地区：Allipuram（都市中心部のスラム）

(1) Sri Ganesh グループ

2006年9月に誕生したグループ。グループメンバー10人全員と、この地区の他のVVK代表メンバーの一人のオバチャンが迎えてくれました。お互いの名前を紹介してから質問形式で話を進めていきました。以下は会話のやりとり。



スラム(都市部)の SHG メンバー

- 私たち 「SHG ってどういうグループなのですか？」
- オバチャンたち 「それぞれ毎月決められたお金をグループに納めて、それをもとにローンの貸し借りをしているのよ。」
- 私たち 「毎月いくら集めているのですか？」
- オバチャンたち 「50 ルピーよ。で、100 ルピー借りると2ルピーの利子をつけて返すことでお金を回しているの。」
- 私たち 「じゃあ、毎月生活するのにいくら必要なのですか？」
- オバチャンたち 「5000 ルピーね。」
- 私たち 「5000 ルピーってことは、じゃあ、ローンは一度にどれだけ借りられて、それを1年で何回借りられますか？」
- オバチャンたち 「1度に1000 ルピーまで、年に2～3回借りられます。」
- 私たち 「じゃあ、1000 ルピー借りたら、どういうことに使うのですか？」

オバチャン1 「私立の高校2年生の娘の学費。」
オバチャン2 「私はここから100キロ離れた実家の村に帰るときね。」
私たち 「ところで、家庭の収入について教えてくださいませんか？」
オバチャン3 「うちは、夫がバイクのモーターチャージの仕事をやっていて1日200ルピー稼ぐの。で、うち100ルピーは夫の店のメンテナンスに使うから、家に入ってくるのは100ルピー。そして、私はサリーの下地の縫製をしていて、月に600ルピーもらっているわ。子供は3人いるの。」
私たち 「あれ、それじゃあ、月5000ルピーには届かないですよねぇ。」
オバチャン3 「お祭りがあると、私の仕事がふえるから、その時は合計で6000~7000ルピーになるから、なんとかお金はまわっているわ。」
私たち 「そもそも、なんでSHGをつくって、VVKに入ったのですか？」
オバチャンたち 「この人（VVK代表メンバーのオバチャン）がやっているSHGの活動を知って、やりたいとおもったの。」

VVK代表メンバーのこのおばちゃんはこの地区のおせっかいオバチャンとして活躍しているようだ。

私たち 「でも、毎月決められた額のお金を集めるのって大変じゃないですか？」
オバチャンたち 「別に不都合など感じてないわ。」
私たち 「旦那さんはこの活動を応援してくれていますか？」
オバチャンたち 「うん、続けなさいと言ってくれているわ。」
私たち 「けれども、特にローンを借りなくても生計は立てられているようだけど、何でSHGに入ったのですか？」
オバチャンたち 「バランスよくお金を回すためにはローンを借る必要があるの。」
私たち 「SHGでローンをまわすのはなぜ？」
オバチャン 「高利貸に借るの怖いわ。SHGは利子も低いし、自分たちのお金だということで、安心感や信頼感があるわ。」
私たち 「ところで、現在グループにはいくらのお金がありますか？それは1年後いくらに増える予定ですか？」

グループがざわざわした結果・・・

オバチャンたち 「今は4400ルピーあります。1年後には11000ルピーになる予定です。」
私たち 「VVKの会議に行ったことあるひと！」

オバチャン5人から手が挙がる。グループが誕生してから月1回のVVK会議に交代で出席しているとのこと。

私たち 「最後にそちらから質問はありますか？」
オバチャンたち 「あなたたちは、なんでわざわざ私たちを訪問してくれたの？」
これは、最初に自ら言うべきだったと、反省。

疑問 「ぎりぎりの生計で自分か夫1人が倒れたら、どうするのだろう？」

(2) Mother Teresa グループ

2007年1月に誕生したグループをこの地区のおせっかいオバチャンに案内してもらいました。15人で構成され、当日は13人が出席してくれました。以下は会話のやりとりです。



スラム(都市部)の SHG メンバーと研修生

- 私たち 「このグループの成り立ちを教えてください。」
- オバチャンたち 「2000年～2003年までこのメンバーのうちの7人が SHG をやっていて、失敗して、そのあいだ活動はしていなかったのだけど、また 2007年1月に再会したの。」
- 私たち 「そのあいだ、他からローンを借りたりしていたのですか？」
- オバチャンたち 「いいえ。私たちお金には困っていないのよ。ミドルクラスだから。」
- 私たち 「じゃあ、なぜ SHG を再会したのですか？」
- オバチャンたち 「ビジネスをやりたいかったのよ。でも、高利貸しに借りて返せるほどのお金は持ってないからねえ。」
- 私たち 「ビジネスって何をするのですか？」
- オバチャンたち 「洗濯石鹼を売るビジネスよ。誰でも必要なものを売るの。30個を135ルピーで買って、1個5ルピーで売って。」
- 私たち 「月いくらメンバーから集めて、今いくら貯金があるのですか？」
- オバチャン 「1人50ルピー集めているわ。貯金は1500ルピー。銀行に入れているけど、銀行の利子は低いわ。ところで、ビジネスは、あなたたちが来てくれた今日から始めるわ！」
- 私たち 「ビジネスの計画はありますか？」
- オバチャンたち 「毎月15日にメンバーのお金を集めて、16日に仕入れをして、17日に販売するの。この計画についてどう思う？」
- 私たち 「3日続けて活動するのは大変ではないですか？」
- オバチャンたち 「1ヶ月のうちのたった3日よ。たいしたことないわよ。」
- 私たち 「ところで、みなさんはどんな仕事をされているのですか？」

オバチャン1 「私はサリーのブラウスの裁縫をしているわ。1個2ルピーで1日10ルピーぐらいの稼ぎがあるわ。」

他、このメンバーのほとんどは専業主婦らしい。

私たち 「旦那さんは？」

それに対しては、全てのメンバーが答えてくれました。仕立て屋、駅の掃除（公務員）、ビデオフォトグラファー、家の警備員、トラックドライバー3人、日雇い（建設現場など）、オートリキシャ（所有）ドライバー、夫を亡くしており息子がクレーンドライバー、ココナッツ売り、父がRCMショップ（百貨店）前のジュース売り、以上。

私たち 「旦那さんは活動を応援してくれていますか？」

オバチャンたち 「もちろん。」

私たち 「ローンを借りたら、何に使いますか？」

それに対し、数人が答えてくれた。

夫（ビデオフォトグラファー）のスタジオをつくるのに使いたい、大学に通う息子の教育費、双子の小学生の学費、英語で教える小学校の入学金5000ルピーの足しにしたい、ココナッツ売りの一輪車を買う、夫（日雇い）が工事現場で怪我をしたのでその治療費と子供の学費

私たち 「1年後にはグループにいくらのお金があると思いますか？」

オバチャンたち 「今、2000ルピーあるから（先ほどは1500ルピーと答えていたが、こちらが正しいらしい）1年後にはセービングし続けると8400ルピーになるわ。ただ、ローンは6ヵ月後に始めるわ。」

最後に、このオバチャンたちの商売開始の儀式を行いました。儀式といわれ、困惑した著者はとんでもない行動（秘密）に出ましたが、止められ、オバチャンのお金をもらう、商品を渡すといったやりとりを何度か繰り返して、儀式は拍手で無事に終了しました。

疑問 「ビジネスのコスト計算はしているだろうか？」

「情報（議事録、VVK会則など）はシェアできているだろうか。」

「メンバー内で発言権の弱い人、もしくはメンバー間でコントロールかきいていたら、どうするのだろうか？」



2. グループ B

(担当：伊藤、石井、加藤、日置)

研修生：加藤伸也、日置雅夫、石井利佳、伊藤 文

JICA：稲生俊貴

ソムニード：原 康子

訪問地区：ビシャカパトナム（都市郊外）

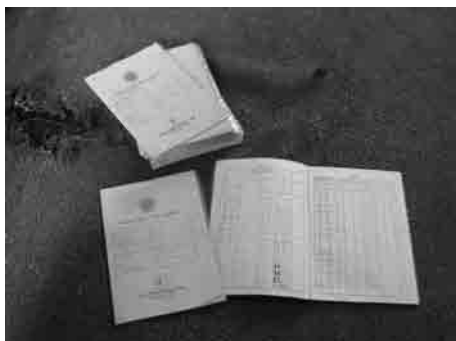
(1) ダナラクシュミグループ

ビシャカパトナム郊外にある 2 つの SHG グループを訪れました。1 つめはダナラクシュミグループ、2 つめはサロジニナイドグループです。

まず先に訪れたダナラクシュミグループでは、メンバーのひとり、マリヤンマさんのお宅に、11 名の方が集まってくださいました。マリヤンマさんのお宅は、ピンク色の塀、壁に、内装も同じような色で調えられた温かみのあるおうちで、20 年前から住んでいるとのこと。住んで最初の 10 年間ぐらいは電気がなかったけれど、政府の資金提供により電気が引かれた、ということで、今は室内にテレビやパソコンもあります。地域での水道は、1 つの井戸を 30 件の家が共同で使っているとのことでした。



スラム(郊外)の SHG メンバーの自宅にて



金銭出納帳(グループ用と個人用)

メンバーのオバチャンたちのうち、働いているのは、新聞販売店を営んでいる方とお米の小売店をしている方の 2 人。その他は主婦ということでした。だんなさんたちの職業は、バスの整備士、バスドライバー、オートリキシャのドライバー、水道工事修理や、日雇い

です。お子さんは、1人から3人がほとんどで、その中には工学系の大学に通っているという子もいました。

ダナラクシュミグループは、2003年3月に作られたSHGで、メンバーは15名。VVKに参加したのは2006年からということです。もともと、周辺の地域にはSHGのグループが1つしかありませんでしたが、マヒラアクションのスタッフがやってきて、SHGを作ることを勧めてくれたために、彼女たちもグループを作ったとのこと。それまでは、各個人で高利貸しにお金を借りていたそうです。

2003年、2004年は、マヒラアクションのスタッフが毎月SHGの管理をしてくれていましたが、2004年からはスタッフが来なくなり、自分たちだけであるようになった、と話していました。現在は、グループの帳簿付けや、銀行に行くなどの作業をすべてメンバー自身が行っています。毎月11日午後3時が、グループのミーティングの日と決まっているそうです。

訪問した際に、帳簿を見せてくださったのですが、グループ全体の帳簿に加え、各個人の帳簿も人数分きちんと付けられていて、しっかりと管理されていたことが印象的でした。資金運用は、グループメンバーが出資した1万5千ルピーを担保に、2005年、銀行から1人1万ルピー、計15万ルピーをグループで借り、それぞれが、子供の学費、商売、家の修理、高利貸しへの返済などに当てたとのこと。その15万ルピーは、あと1年で返済予定。グループから出資した1万5千ルピーは担保になっているため、今はグループのお金はあまり動かすことができないのが現状だそうです。

そのほか、VVKが運営する銀行からお金を借りている人も4名いる、とお話されていました。2006年10月にVVKの事務所で行われた会員総会には、グループ全員で参加したそうです。

将来の展望をお聞きしたところ、現在いるVVKのメンバー約500人全員が、必要なときにVVKの銀行からお金を借りることができるようになるくらい、VVKの銀行機能を充実させることと、VVK全体で何かプロジェクトをすることを将来したい、とメンバーの方々は語っていました。

(2) サロジニナイドグループ

2つめのグループ、サロジニナイドグループを訪れた集会所には、同じカーペンターコロニーという地域内の、別の2つのグループ、シッディビナイカグループと、サイババグループのメンバーからも、1人が参加してくれました。

シッディビナイカグループは2003年に結成され、PCUR-Link発足時の2004年からVVKに参加した比較的経験の長いグループ、サロジニナイドグループとサイババグループは、2005年に結成され、2006年の後半からVVKに参加している比較的新しいグループです。

カーペンターコロニーには3グループを含めた計6つのSHGがあり、VVKに参加しているのは、これらの3グループだということでした。それぞれメンバー数は、サロジニナ

イドグループが 11 名、シッディビナイカグループが 12 名、サイババグループが 15 名。

当初から VVK に参加していたシッディビナイカグループから 2 名のメンバーが来て、VVK に入るといいよ、と勧誘をしてくれたのが、サロジニナイドグループが VVK に入ったきっかけだったと言います。サロジニナイドグループはそれまでも SHG を運営していましたが、どうやってお金をためて、誰がその管理をするのか、誰にも聞かずにやっていたそうです。それが、VVK に入ると、お金をどのように管理するのかが分かり、使途不明なお金も一切なくなり、VVK メンバーがきちんと説明してくれたと、サロジニナイドグループのリーダーは話していました。詳しいお金の管理のしかたも、VVK の指導員が来て教えてくれたとのこと。グループには読み書きをできる人がいないので、出納帳は隣のグループのメンバーが書いてくれている、ということでした。

シッディビナイカグループのリーダーは、初代 VVK の代表でもあるラオランマさん。SHG を自分たちでやってみてはいたけれど、運営がうまくいかず活動を停止していたところに、マヒラアクションのスタッフが来て、もう一度やってみたらと勧められたそうです。そしてマヒラアクションの指導の下に活動を行っているうちに、PCUR-Link が始まり、そこで色々なことを学ぶことができることを知り、本格的に VVK に関わるようになったシッディビナイカグループ。研修で色々なところを訪れることができ、他の SHG の活動も見ることができたことがよかったと、ラオランマさんは言っています。

VVK 発足当時、本当にやる気のあるグループだけで VVK を始めるためにソムニードが設定した 10 項目もクリアして VVK 発足メンバーの 1 つとなっています。メンバーに残って様々な研修を受けられることはグループにとっても得だと考え、一生懸命に活動を行ったので、10 項目をクリアすることも難しいことではなかった、とラオランマさんは話していました。最初、研修を受けた内容の中には、なかなか分かりづらいものもあったけれど、自分で理解してメンバーに伝える、という過程を経るうちに、理解も深まり、様々な作業を自分たちでできるようになっていったそうです。ただ、当初の勢いをずっと続けること



話し合いの中で金銭出納帳をつける意思表示

は難しく、今は特に、グループ内でのミーティングの出席率が下がってきてしまっていることが、ラオランマさんが困っていることだと話されました。後からの「寸劇」でも話が出ますが、読み書きが出来ないメンバーがあり、「帳簿を付けられない」と話が出ました。他のメンバーから、「家族とかに読み書きが出来ない人がいないの」と聞かれ子供が出来ることが分かり、話が盛り上がり、「じゃあ、一ヶ月半ぐらいで出来るようにする」とその彼女は言いました。本当に、真剣に取り組む姿勢が伝わりました。

VVK のオフィスから車で 20 分ほどのところにあるカーペンターコロニー。SHG のメンバーたちも、VVK のオフィスに行くときには、バスかオートリキシャを使うそうです。私たちが訪れた集会所は、茅葺のような屋根に土塀の建物。念願だった地域での集会所建築を、地元政府からの資金を使って自分たちで造った建物だということでした。

<コラム：インド社会の「豊かさ」>

JICA インド事務所 NGO デスクコーディネーター 佐々木 結

今回の研修であらためて実感したのは、一日一人当たりの所得や GDP などでは測ることのできないインド社会の「豊かさ」だ。

逆説的に聞こえるかもしれないが、VVK の成功をアメリカや日本などのコミュニティ開発に応用した場合、果たして同様の結果が得られるかどうかは疑問だ。インドでは信頼関係を築くのになんとしたコミュニケーション上のコツと時間を要する。信頼の存在しない関係においては、約束破りや裏切りもやむをえないとされる一方、いったんしっかりと信頼関係が築かれた後は、その関係の強さたるや、多少の誤解や無礼な振舞いぐらいでは揺るぎもしない。VVK のおばちゃんたちは、こうした豊かな人間関係の土壌の上に育ち、他人を信頼すること、信頼関係にある相手をとことんまで助けることに慣れている。日本では美談ともてはやされるような話がそこら中にあるのもそのためだ。

さらに、世界各地で活動してきた JICA のある専門家によると、インド人の知識（あるいは知識人）に対する尊敬の念、そしてそれを欲する貪欲さは世界の他に例を見ない、という。新しいことに熱心に取り組む新参者をやっかみ、足を引っ張るなどという、日本を始め他地域で見られるような現象が一部にはあっても、同時に必ずそうした取り組みを尊重し、見守ってやろうという寛大さ、心の豊かさがある。VVK 設立を果たしたおばちゃんたちの知識に対する貪欲さ、新たなことを教わり、成長したいという欲求。これは単に金儲けにつながるからという即物的な思考を超えたものであるように思われた。

もちろん、これがいい方向にばかり働くわけでは決してない。関係を築き、知識を伝達する過程では、多くのいらぬ誤解や落胆が伴うこともしばしばである。しかし、VVKの成功の裏には、計量的なものの方では見落としがちな重厚な人間関係のネットワークがあり、いったんその歯車がかみ合えば、プロジェクトの成功はなかば約束されたものとなる、ということと言えるかも知れない。先進国の「豊かさ」を押し付けるだけでなく、インド社会の「豊かさ」からどこまで学ぶことができるか。私たちの「心の豊かさ」が問われている。

2-2-5 VVKプレゼンテーション

(担当：山田、芦澤、石井、上村)

4月2日(月)午後

VVK事務所にて

VVK代表とスタッフによるプレゼンテーション



VVK事務所の庭にスタッフの手づくり花壇



VVKとソムニード・インドのスタッフ

1. VVKの活動とその歴史

発表者：ラマランマさん（初代VVK代表）・D.ビジャヤラクシュミさん（現VVK代表）

- 2004年 7月 PCUR-LINKプロジェクト開始
- 8月 研修 「PCUR-LINKとは何か」
- 9, 10, 11月 チェンナイのSHG連合体を視察 「SHGとは何か」
- 66グループのSHGを訪問し、これまで仕組みをよく理解していなかったために、リーダーに仕事をまかせっきりにしてきたが、メンバー一人ひとりが責任を分担しなくてはならないことを学んだ。
- チェンナイのSHG視察の成果を基に、PCUR-LINKプロジェクトのパートナーとしてSHGがクリアすべき10のポイント（指標）を定めた。ミーティングは月1回行っているか、役割分担をしているか、メンバーはローンの返済をきちんと行っているか、貯蓄は毎月しているか、等のポイントを満たしたSHGはこの時点で7グループあった。この7つのグループが集まり連合体をつくり、VVKと名づけた。事務所を借りて、VVKの活動が始まった。
- 2005年 3月 VVK設立
- 7つのグループからそれぞれ3名の代表メンバーが集まり、21人で実行委員会をつくり、そのうち5人が代表・事務局担当・会計などの役職についた。
- 2006年 1月～ 新しいSHGをVVKへ勧誘
- 4月 会員総会で代表交代
団体登録に向けて動き出す
- 9月 パナカトナム視察
農村のSHGと何かできないかを視察。雑穀の販売比較調査
- 12月 団体登録完了

2. VVK事務局の仕事

発表者：K.ダナラクシュミさん（VVKスタッフ）

勤務時間は10:00～17:30。VVKのミーティングの準備、議事録の作成を担当している。

主な業務は以下のとおり。

- ① VVK各個人が会費を支払っているか確認
- ② 議事録を書く
- ③ コンピューターに入力（データ化）
- ④ 資料をつくる
- ⑤ 資料の配布状況を確認
- ⑥ 11種類の帳簿の記入（お金の管理）

⑦ 文房具の管理

⑧ 銀行に行く

昨年度の VVK の取引高は 23,000 ルピーだったが、今年は 146,000 ルピー（7 倍に増加）。

3. ゲームを用いた SHG トレーニング

発表者：G.ビジャラクシュミさん（SHG トレーニング指導員）

VVK は、新加入 SHG のためにお金の管理についてゲームを用いてわかりやすく指導している。この日も私達調査チームに対して実際にゲームで指導のシュミレーションをしてくださいました。

VVK による SHG トレーニングの内容は以下の通り。

- ① 何が収入（会費、ローン返済、利子）で、何が支出（ローン貸し出し）かをわかってもらう
- ② どうやって金銭出納帳をつけるか
- ③ どうしたら内部資金を上手く運用できるか（早く資金を回転できるか）
- ④ 仕訳帳（貯蓄、利子、銀行等）の説明
- ⑤ 損益勘定表、貸借対照表の説明
- ⑥ グループの問題解決には規則をもつことが必要であることを説明
- ⑦ 議事録の記入方法



VVK トレーナーによる金銭出納帳の説明
（隣で原康子プロジェクト・マネージャーが通訳）

指導員は、「指導員のための研修ガイド」を持って、トレーニングを行う。

トレーニングはゲーム（お金の動きのシュミレーション 3 ヶ月分）と金銭出納帳 3 か月分の記入方法に 1 日、ローン・貯蓄・帳簿と議事録、グループのルール作りに 1 日の計 2 日間。トレーニングを受けてもなかなか実行できないグループには何度も訪問してフォローする。金銭出納帳のつけ方に最も長い時間を要する。

「VVK に加入することで、1 つのグループではできないことができるようになるし、会計がわかるようになる。商売をやったことがなくても一緒にトレーニングを受けられる。自分のグループだけじゃなく、他のグループにも教えられる。」と、明るく前向きに、何よりも楽

しように話す VVK のオバチャン達はチームにもパワーをお裾分けしてくれたようです。

2-2-6 研修生チームプレゼンテーション

4月2日(月)午前

VVK 事務所にて

研修生チームプレゼンテーション

参加者 VVK メンバー (9人の代表)

ソムニード・インド

和田信明、原康子、前川香子

ラマラジュ、イシュワリ、ラトナ

JICA 稲生俊貴、佐々木結

研修生 男性チーム 上村眞由、加藤伸也、日置雅夫

女性チーム 石井利佳、山田理恵、芦澤弘子、伊藤文

この日は女性チームと、男性チームとに分かれて、VVKの「オバチャン」たちに研修生が感じたこと、学んだこと、知りたいことを発表形式で行いました。「オバチャン」たちの反応を報告文、写真の中から感じ取ってください。

1. 男性チーム

(担当：日置、上村、加藤)

(1) プレゼンテーションの項目

1) VVK がすごいと思ったこと

計画性

2) 何を学んだか

情報の共有

3) VVK メンバーへの提言

家計簿、協同作業所、共同購入、事務所の暑さ対策

4) もっと知りたいこと

生産・物流センター、トラブルと解決

(2) 項目と内容

1) 計画性

目標を定め、そのための方法をよく検討し、実施しようと努力している。

2) 情報の共有

VVK の事務所には、商品説明、年間計画、会議の開催状況、日々の連絡、参加団体メンバーの写真など活動状況をわかりやすく整理した資料が壁等に貼ってある。

3) 家計簿

SHG では金銭出納帳を作成しており、家計簿を作成することでもっと金銭管理を充実することが重要

4) 協同作業所

VVK メンバーによる共同作業や共同作業をする場所の確保が重要

5) 協同購入

一人で買うよりはグループで買うことで安く安定的に買うことが重要

6) 事務所の暑さ対策

屋上によしずを置くか、屋上で植物を育ててみてはどうか。

7) 生産・物流センター

プロジェクトの目的である生産・物流センターは怎么样了のか。

8) トラブルと解決

VVK を運営していく上で、いろいろなトラブルが発生したと思いますが、どのように解決したのか。



研修生(男性チーム)によるプレゼン

(3) VVK メンバーの反応

笑顔もなく、全体的に反応が鈍かったです。共感できる部分が少なかったことが原因でしょうか。以下は VVK メンバーからの反応。

「情報の共有については、これからも努力をしていきたい。」

「家計簿を私はつけているけれど、日本人はどのくらいつけているのか。」(家計簿をつけている日本人は数名しかいなかった。)

「生産・物流センターについては農村部の SHG と農作物について相談をしている。都市部での販売についても検討中。いろいろやるべきことが多くある。」

「SHG のトラブルは VVK の会議で検討され、その後 SHG にアドバイスをしている。」

「VVK の合意形成は、年 2 回の総会で行う。2/3 以上の参加で、2/3 の同意が必要。」

2. 女性チーム

(担当：石井、芦澤、伊藤、山田)

私たち女性陣は、VVK のオバチャンたちにサリーを着せてもらって大喜びしながら、ビジャカパトナムでのフィールドワークを通じて、1.VVK の何がすごいと思ったか。2.VVK から何を学んだか。(自分にとって、ためになること) 3.VVK に何か提言はないか。4.もっと知りたいこと。以上の4項目について、話し合い、短い言葉にまとめ、項目ごとに発表しました。

(1) VVK の何がすごいと思ったか。

何事にも前向きで、あきらめない。意志の強さを感じる。途中で止めない。読み書き、計算が出来る出来ないに関わらず、自分が勉強したことを他人に伝えることで、より一層学べる。⇒「学ぶ楽しさ、生かす喜び」としました。4/1VVK のワークショップの中で私は、問題の多いオバチャンを演じ、メンバーとしての受け入れを拒否されていたのですが。この発表の後「メンバーとして認めるわよ。」と言われ、とても嬉しかったです。



研修生(女性チーム)によるプレゼン

(2) VVK から何を学んだか。

任せる。信じる。育てる。出来ないと言う思い込みをせず、見方を変えることで、出来る事もある。全員で情報を共有することの大切さ。⇒「信じて分け合う」としました。

「できない」と決めつけてしまうと何も始まらないけれど、常に「必ずできる」「大丈夫！」というポジティブ・シンキングをしている VVK のオバチャンたちは、本当にパワフルです。この姿勢から、それぞれの現場で前向きに仲間を信じて活動していけば、必ず道は開けるのだと、改めて「気づき」を得たように思います。

(3) VVK に何か提言はないか。

「会員数やお金(資金)だけが増えればいいのか?」、「団体全体としてのミッションが、前日のプレゼンテーションの中では見えにくかった」との問題提議から、共通の理念、将来の目標をもつべきでないか。理念という言葉伝える自身がなく、他に変わる言葉を考えた結果⇒「夢の共有」としました。

(4) もっと知りたいこと。

- ・勧誘から加盟までのフォローはどうなっているのか？
- ・農村部との連携はどうなりそうか？何がバリアで何がメリットか？
- ・SHG メンバーで緊急資金が必要な時、どの様な支援方法があるのか？

以上を質問しました。

2-2-7 ソムニードへのフィードバックとソムニード事務所訪問

(担当：加藤、伊藤、日置)

1. ソムニードへのフィードバック

現地（ビシャカパトナム）での研修の最終日に、原康子プロジェクト・マネージャーよりレポートの提出を言われ、研修生各自がレポートを作成しソムニードに提出しました。

2. ソムニードからのフィードバック

いよいよ研修も最後となり、ソムニードスタッフの原さんとまとめに入りました。それはなかなか厳しい指摘でした。

(1) VKK のオバチャンとの対話や訪問について

原さんからは『研修生の気持ちが「オバチャン」に伝わっていない。質問をいろいろしていたが、質問に対して、研修生は「なにをどう思っているのか、明日から何をしたいのか」も入れて、かつ「私は」を必ず入れて質問しないと「オバチャン」に伝わらない』と指摘されました。

また、VKK の「オバチャン」への **Feed back** にも触れ、この時の男性チームの発表時に和田さんがぼそつと言われた言葉として、「男はこんな事を発言（一方通行）するから失敗する」と教えて頂いた。確かに、男性チームの発表の時は「オバチャン」達はシラッとしていたし、女性チームの時は身を乗り出して聞いていたのを思い出しました。男性チームは紋切り型であり、女性チームは気持ちの入った言葉で発表していました。原さんは、女性チームの特徴として優しい言葉、見たことを言葉として、或いは例題（医者になりたい等）を上げ発している。男性チームの言葉がオバチャンに届かなかったのはこれらがなかった、と言われました。（男組は 50 歳以上であり、女性にどう接していいのかわからない年頃です。これは、訳のわからない言い訳でしょうね・・・反省！）。

今年で3年の期限が切れるので、今後の生産・物流センターについては、「何をしたらセンターが可能になるのか」、「何をしたらセンターは失敗するのか」が課題となるし、VVK のオバチャン達の課題でもある、との話をされました。

(2) 失敗からの教訓

最後に、原さんは次のことを話されました。

NGO と現地との関係はとかく、「金の切れ目が、縁の切れ目」となる所が見受けられる。井戸は掘ったが使われていないとか、木を植えたが増えていないとか、過去の事例を出されて話をされた。

これらのことから次のような趣旨の話が出ました。

- a. 二度と同じ失敗を繰り返さない。
- b. 自分の知らないことはやらない。
- c. 相手に自然に分かってもらうまで、口を出さないこと。
- d. VVK のオバチャンが言うまで待つこと。
- e. オバチャン達が、「自分は出来ない」ことを理解したことが素晴らしい。

これらの基本は、情報の共有がもっとも大事であり、この3年間は継続して取り組みました。このことが何とか失敗を繰り返さない元になったとも話されました。

JICA に事業提案する2年前から、01~02年の間に、現地 NGO 「マヒラアクション」の活動に参加する形で、このビシャカパトナムのスラム街に入り、調査活動をしていたそうです。

3. ソムニード・インド事務所訪問

4月3日はビシャカパトナムでの研修を終え、デリーに向かう日でした。フライトまでの短い時間でしたが、今回のビシャカパトナム研修を引き受けて頂いたお礼を述べるため、ソムニード・インド事務所を訪問しました。すでに和田さんは日本に帰国しており、事務所代表のラマラジュさん、原さん、前川さん及び事務所スタッフが私たちを出迎えて下さいました。

代表のラマラジュさんと会談し、ラマラジュさんと和田さんとの友人関係、マヒラアクションとソムニードの歴史的関係、現在までの事業活動等のお話や質疑等が行われました。本当に短い時間でしたが、世界のどこでも多くの人の幸せを願い、毎日を過ごしていることに全員感激してデリーに向かいました。

ソムニード・インド、VVK のオバチャン達に、この場を借りてお礼を申し上げます。本当にお世話になりました。また、色々なことを学ばせて頂き、ありがとうございました。



ソムニード・インド事務所を訪問

(注) ソムニード・インドには、ラマラジュさんは二人います。ソムニード・インドの代表をしているラマラジュさんと VVK のファシリテーターをしているラマラジュさんです。

＜コラム:私がピシャカで最後に発言したこと＞ (芦澤)

最後、という独特の雰囲気の中で、私は必死に考えようとしていましたが、考えれば考えるほど、分からなくなっていくのを感じました。「いろいろ知りたい」という想いで、この研修を受けてきました。そのなかで、「人との信頼関係をどのように築いていくか」も知りたかったひとつです。しかし、ラマラジュさんの話を聴いて気づきました。私が知らぬ間に求めていた答えは「HOW TO」だったということです。自分で自分にビックリしました。自分がこれからいろんな人と接するなかで、自ら模索し、自ら築いていくものだと、自分に言い聞かせながら、発言しました。



2-3 JICA 事務所

2-3-1 JICA インド事務所での振り返りセッション

(担当：山田、芦澤、石井、上村)

4月4日(水) 午前

ビジャカパトナムでのセッションを終え、デリーに戻ってきたチームは、現地で学んだことを次の視点から整理しました。

- 1) ソムニードと VVK の関係
- 2) ソムニードと JICA の連携

1. ソムニードと VVK との関係をたどるなら何？

コースリーダーから出されたお題に対して、メンバーからは多種多様な譬えが発表されました。

- ・ 師匠と弟子
- ・ 美術の先生と生徒
- ・ トレーナーと盲導犬
- ・ 動物の親子
- ・ 大地と作物
- ・ 自然と人間
- ・ 太陽と旅人
- ・ 運んでもらう人と自動車
- ・ 助産師と妊婦
- ・ 触媒と溶液
- ・ キリスト教宣教師と信徒会 (16C 前半)
- ・ 伝道師と土地の人
- ・ 旅芸人と旅先の人
- ・ 旅の武芸者と道場に通う人

「教え、教えられる」、「育む」、「刺激され合う」、「受け手が最終的には自立」、「新しいものが生み出される」、「互いに尊重される」...といった関係が考えられそう。

しかしながら、これらは当然、様々な側面を持った関係です。ソムニードの和田さんが話されていた言葉の中に、「ソムニードがオバチャン達の活動に参加させてもらうのだ」「住民主体って言っても、私たちのやっているのはソムニード主体だ」というずっしりと重みのあるものがありました。ここには最終的にオバチャン達が自分で歩き出すことを目指すソムニードの彼女らに関わる強い意志を感じます。

2. NGO と JICA の連携

2つのグループに分かれて、NGO にとってのメリットと JICA にとってのメリットをそれぞれ話し合いました。

(1) ソムニードにとって JICA と連携するメリットは？

- ①資金
- ②情報の共有 (JICA と NGO)
- ③NGO 同士の情報の共有の場
- ④事業を進める上での行政とのやりとりをスムーズにする
- ⑤組織体制を整える
- ⑥スタッフの事務処理能力を引き上げる
- ⑦いい意味での緊張感
- ⑧思い込みを修正できる

上記以外に、全体での話し合いからでてきたのは、

- ⑨物資を現地に送るときのサポート
- ⑩JICA の人材を活用できる
- ⑪ネームバリュー
- ⑫プロジェクトの成果を制度化する (持続性、点から面への広がり)

(2) JICA にとってのメリット

- ①見える情報、生きた情報が得られる
- ②インドと日本の友好関係のきっかけとなる
- ③今後の他の NGO との関係・協力についてのアイデアを得る

しかし、プロジェクトが進み、地元政府の息のかかった SHG が VVK に加入していくことになると、地元政府との軋轢を生み、JICA とインド政府との関係に影響があるかも...といったデメリットも上がりました。これについては、プロジェクトの進捗状況をステークホルダー間で共有することによって十分防ぐことができると思われます。

3. JICA にしてほしいこと / してほしくないこと

(1) JICA にしてほしいこと

- ・情報の提供
- ・事業内容の変更への柔軟な対応
- ・研修の場の提供 (JICA 側と NGO 側が一緒に参加する)
特に、経験の少ない NGO にも JICA の活動を知ってもらえるようなもの
- ・コーディネーターとしての JICA (NGO と地域、JICA と NGO)
- ・専門家の紹介
- ・NGO の C/P を日本に派遣 (本邦研修の実施)

- ・プロジェクト報告会や交流の広報
- ・草の根に関わる NGO の横の繋がり、情報交換する場
- ・青年招へいの受入を草の根実施団体に繋ぐ
- ・草の根事業に関する FAQ データベースの充実
- ・青年招へい/研修受入（課題別・国別）の情報をその国に関わる NGO 側にいかに伝えるか
- ・草の根技協の取り組みをマス・メディアを通して広報

(2) JICA にしてほしいこと

- ・放ったらかしにしないで
- ・すべてを日本で判断しないで
- ・地域や NGO の状況にそぐわない単一的な見解や対応をしないで
(待遇、資金の使い方等)

人があってこそその NGO 活動なので、関わる活動家の経験をもっと重視してほしいという意見がでました。

2-3-2 JICA 事務所フィードバック

4月4日(水) 午後

JICA インド事務所にて

4月7日(土) 午後

JICA 地球ひろばにて

研修生の報告

(1) パワーポイントを使った説明

添付資料のとおり

なお、この資料は JICA 地球ひろばでのみ使用。

(2) 寸劇による説明

JICA 主催 NGO 海外研修のメインテーマはインド、アンドラ・プラデーシュ州ビジャカパトナム市で活動している NGO ソムニードのプロジェクト実施状況を見学し、望ましい NGO と JICA の連携のあり方を模索することでした。

インド社会の住民主体の活動をどのようにして日本社会に紹介するか。SHG、VVK、SOMNEED のおかれている状況と3者の関係をどのようにしてまとめ、報告するか。私たちの報告手段はスキットでした。JICA インド事務所と地球ひろばで上演しました。



JICA インド事務所で寸劇(第1幕)



JICA インド事務所で寸劇(第2幕)

1) 第1幕

(担当：上村、芦澤、石井、上村)

場面設定 □会員数 10 名の SHG 例会

□代表以外のメンバーは金銭出納帳を見ていない。

□例会の参加者はいつも 2～3 名

□金銭出納帳は地元 NGO が記帳している。

□議事録は執っていない。

登場人物 □SHG 代表

□会員

□会員

□VVKのメンバー

あらすじ SHG 例会参加者は全員、会に対する不満を持っていて、例会の度に口論となる。

解散寸前、会員の 1 人が VVK のメンバーを例会に連れてくる。

彼女から SHG の運営方法を示唆してもらう。

4 月 7 日 (土) 午後 JICA 地球ひろばでの上演後の反応、SOMNEED 代表理事の和田信明氏は笑いこぼしていました。

2) 第2幕

(担当：伊藤、加藤、日置)

VVK への勧誘シーンに続き第2幕では、VVK スタッフが、VVK に加盟している SHG を訪問し、現在の状況を聞く、というシーンを行いました。VVK に加盟後、SHG ではどんな発展や問題が生じる可能性があるのか、ということと、SHG・VVK・ソムニードの三者の関係を示すことが目的です。

〔寸劇〕

SHG メンバーが集まっているところにやってくる VVK スタッフ。挨拶の後、最近の調子を聞きます。グループ A は、加盟して1年のややベテラングループであり、グループ B は、3か月の新米グループです。

グループ A は、VVK に参加したことにより、グループ内でのお金の循環が明確になり、今はメンバー皆がスムーズにお金を借りることができるようになった様子。前回の総会の議事録もリーダーがきちんと全員分用意して、情報共有をはかっています。最近、子供の大学進学のためにお金を借りた人がいた、とリーダーが VVK スタッフに報告します。帳簿も、グループ全体のもの、各個人のもの、とそれぞれきちんと付けられていて、お金の流れも明確、SHG 内での資金運用の仕組みをきちんとメンバー全員で共有できるようになったことによって、皆が必要なときにお金を借りることができるようになり、VVK に参加して本当に良かったと思っている、とリーダーが語ります。資金運用によってグループ全体のお金もたまってきたので、小さなビジネスを始めようかと思っている、と話すグループ A のリーダー。

一方、グループ B は、リーダーが先日、帳簿付けの研修に参加したけれど、まだ帳簿ができていないとのこと。どうして帳簿がないのですか、と尋ねる VVK スタッフに、実は自分を含め、グループ内で読み書きができるメンバーがいない、とリーダーは打ち明けます。グループメンバーには読み書きできる人がいなくても、家族にはいないですか、と聞く VVK スタッフ。リーダーは、自分の子供なら文字を読んだり書いたりできる、と言います。それならば、子供に帳簿の付け方を教えて、子供に付けてもらったかどうかと VVK スタッフが勧め、リーダーも、そうしてみる、ということで合意しました。いつまでにできますか、という質問に対し、リーダーは、いつまでならできるかしらねえ、と考えあぐねますが、ここでソムニードから VVK スタッフに対してこっそりと指示が入り、「いつまでにできるか、きちんとその場でリーダーに決めさせなさい」とのこと。その指示を受けた VVK スタッフがはっぱをかけると、リーダーは、1か月半で帳簿を作ります、と宣言。スタッフもその言葉を聞き、また1か月半後に訪れることを約束して、その場を去るところで、シーンは終わりです。

〔寸劇おわり〕

限られた人数と時間内での寸劇でしたが、この第2幕では、SHG 運営の成功例と、グループが抱える問題の具体的事例に加え、いかにソムニードが、VVK のスタッフ、ひいては SHG のおばちゃんたちが自らの意志で活動をすすめてゆくことを、ソムニード自体は前面に出ることなく、上手に引き出しているか、ということが一番に伝えられればと思ってシナリオを作りました。



2-4 帰国後国内研修『和田語録』

(担当：長畑)

4月7日(土)、インドから帰国したチームは数日前にビシャカパトナム(以下、ビシャカ)から一時帰国されていたソムニードの和田信明代表のお話を聞きました。このセッションは、ビシャカで我々が見聞きしたものを振り返り、「あれはいったい何だったのか」「なぜなの?」という種明かしを和田さんからお聞きする良い機会となりました。ここで語られた和田語録から、心に残るいくつかを次に記したいと思います。

「相手を知ることが大切。皆さんがビシャカに来られて最初のセッションで、『スラムのオバチャンのことを知りたい、話をしたい』と言われましたね。これはとっても重要。ソムニードも草の根技協を始める2年ほど前から、ビシャカのスラムの人たちと関わりを始め、『相手を知る』ことから始めました」

「遠くの目標を見据えて、そこに向けての道筋については『いきあたりばったり(臨機応変)』に対応すること。PCUR-LINKの場合には、農村部貧困層のオバチャンたちと、都市部の中産階級の人たちとを、何らかの生産物を通して繋ぐこと、そしてそれをスラムのオバチャンたちが担うこと、そういう目標はクリアにもっていた。でも、そこへの道筋については、その場その場で作っていく。ただ、『いま何処にいるのか』についての認識は必要だから、そのための道しるべは事前につけてシェアしておく」

「相手は人間だから、こちらが思った通りになることは少ない。相手の潜在力は信頼するけど、期待はしない、ということ」

「ファシリテーションとは、『私の考えていることを、あたかも相手が自分で考えたかのようにもっていく技術』とも言えるでしょう」

「ファシリテーターとは、当事者自身が回答を出すのを助ける役割。知識を得る方法を教える。また本来の当事者に当事者意識をもってもらおうようにすることも」

「大事なのは行動変容。いくら『相手を尊重する、同じ目線にたつ』と言葉では知っていても、それが態度として表れないと意味がない。例えばスラムのSHGのミーティングに出席するとき、こちらが何か言いたい時は必ず手を挙げて許可を求めてから発言する。こういう態度をとることで、『自分はいくまでオブザーバーで、このミーティングはSHGのものなのだ』という考えが表に出ることになる」

「よく途上国で村の人たちに対して自己紹介も何もなしに、『あなたの名前は何ですか、
どういう仕事をしていますか、将来の夢は何ですか』と訊く人がいます。同じことを日本で
外人さんからやられてみたら、どう思うだろうか。相手に訊く時は、まず自分は何者
であるか、なぜここに居るのか、何をしたいのか、を明らかにしないと」

「質問をするときは、相手の知っていることしか訊かない。相手が話したいことを話し
てもらおう。これが原則」

「新しい地域に入る時、何よりも白紙になること。もちろん予備知識は得ておくほうが
いいが、いったん地域に入ったら、それはまず捨てること。虚心坦懐に観察し、仮説を
たてること。私も過去に痛い目を何度もみながら、その技術を磨いてきた」

「JICA の草の根技協は、あくまで『パートナー』である。そしてパートナーに対しては、
日常的に現場で起きていることを、いつでも分かち合っていくことが大切。こちらから
積極的に働きかけていくこと」

「私たちにしても、『あいあいネット』にしても、途上国だけでなく、日本の地域社会の
ことを意識している。日本の地域はこれからどうなっていくのか。途上国の地域に関わ
ることで、日本の地域社会を今後どうしたらいいのか、についての **Alternative** を見てい
きたい」

2-5 研修の感想と自分の今後の仕事に生かせること

特定非営利活動法人 エコ・コミュニケーションセンター 芦澤弘子

研修前に比べ、荷が重くなった。

研修というと、たくさんの学びがあって、ヒントを得て、自分のなかでの課題が解決されて、荷が軽くなると思込んでいた。

だが、軽くなるはずがなかった。問題を発見して、それを課題として認識し、もやもやしながら持ち帰る、といった研修だった。イコール、有意義な研修であった。

下記、私のお持ち帰りリスト（一部）です。

1. フィードバックを心がける

相手が話したことに関して、返すことで互いの考えや想いの共有ができし、相手が話したことが意味あるものになる。

ソムニード・インド事務所での原さんの「フィードバックの大切さ」に関するお話を聞いて、フィードバックをしないということが、話していただいた皆さんに失礼な態度であって、自分にとってもそれはもったいない行為であることに気がついて、ゾツとした。

心がけよう、と思ったこの日から、職場でのメールの返信をこまめにするようになった。そうすると、相手から「メールの確認ありがとうございます。」と送られてきた。相手に反応を返すことで、相手はきちんと読んでくれたと判断する。そこから信頼関係は生まれるのだと身をもって感じた。

2. 自分なりに言葉の意味を理解して使う

VVK へのプレゼンテーションで、「夢の共有をしてください」と話したのだが、うまく伝えることができなかった。本当は「理念を示してください」と言いたかったのだが、理念という言葉は伝えにくいと判断し、悩んだ挙句「夢」という言葉を使った。伝えにくいと感じた理由は自身が「理念」という言葉を理解できていなかったからだ。理解できていないで使う言葉は相手に伝わらない。

3. 知らないまま自分のなかで答えを出さない、機会を見つけて現場を見る

都市中心部のスラムは自分の想像と全く違っていた。まわりやメディアによるイメージの刷り込みはとても怖い。それと、イメージができてから安心しきっていた。まさに自分は「知ったかぶり」であった。実際観たことない、触れたことのないものは受身の情報ではなく、自ら情報を獲得するために現場を観る機会をひとつでも多くつくっていきたい。

4. 人との信頼関係の築き方は教わるものじゃない

どうすれば、相手と上手く連携をとっていけるのか？それは個人が試行錯誤・悪戦苦闘・切磋琢磨するものであって、教わるものではない。ソムニード・インド事務所のラマラジュさんがこれまで代表の和田さんとどのような付き合いを続けてきたかを話してくれた時、このように思った。

友達との付き合い方は本を読めばできるものではない、というのと同じ。ただ、試行錯誤・悪戦苦闘・切磋琢磨するなかで出会う人々からキーワードはもらえる。上記の1, 2, 3も信頼関係を築く為の大切なキーワードだと思う。

このリストを読んでもみると、なんてあたりまえで単純なことを書いているのだろうと思うだろう。

5. ものごとを複雑にせず、シンプルに伝えて広げよう

VVK 事務所での初日、ソムニード側から禁止用語集が配られた。みんなが分からない難しい言葉は使わない生活が続けて、ふと、難しい言葉に触れると、「分かりやすい言葉を使えばいいじゃない。なんで、わざわざ難しい言葉を使って、物事を複雑にするのだろうか。」と思えてくる。世界を複雑にしているのは、難しい言葉を使う自分たちだ。難しい言葉が、それを理解できる人と、理解できない人の境界線を引く。

分かる話は聴く、分からない話は眠くなる。眠くならない話をして、自分の輪を広げたい。

最後に、この研修で出会った皆さまと繋がりを持てたことに感謝します。ありがとうございました。

特定非営利活動法人 みえ青少年ボランティアネットワーク 石井利佳

インドとは、誰が語っても決して言い当てることが出来ない国。へ行って、見てみたい。こんな私に、このような機会をあたえてくださり、ありがとうございます。ソムニードのインドへの想いと私のインドへの想いは、形は違いますが、インドへの愛は同じくらいと勝手に思っています。インドと日本の架け橋となっているソムニードの活動をお手本として、私なりに出来ることから、生活の中の大切な事として、日本で活動して行ければ嬉しいです。

何時の日か、ビジャカパトナムの彼女たちと再会出来ることを願っています。

短期間の研修であったにも関わらず収穫の多い研修となったのは、第1に研修対象「SOMNEED」が革新的で、これからのNGOの在り方を実践しているNGOであったこと。第2に研修参加者たちの積極性に因る。と思っています。

私がSOMNEEDから最も強く学ばせていただいたことは、**地域住民に自助努力の必要性を気付かせ、その生育を見守り育てる**。一貫した姿勢です。

これまでの私たちの活動は、建前は自助努力と言いながらも、「日本製のメジャーで測定し」、「問題点を指摘する」、「解決方法を指導する」、「それに伴う費用などを援助する」、そして「期間内に何らかの成果を表示する」でした。常に自分たちの立場で活動し、自助努力とはほど遠い、むしろ反する活動をして、自己満足していた様な気がします。

私たちがしてきた活動方法は日本の多くのODA、NGO、がやってきたやり方ではなかったろうか。その最大原因は**目に見える成果**を日本国内で求められるからでしょう。

今回の研修で、若い有能な人たちに引っ張ってもらって、大いに刺激を受けました。東京でチームが結成された時、地方の樵おやじがチームメイトに迷惑をかけるのではないかと不安でしたが、なんとか乗り切れたのはチームメイトのお陰です。

さて、この研修で学んだSHG、VVKをどう生かせるか模索しています。私たちが今活動しているミャンマー連邦では政治的理由で導入は不可能です。そこで、在日外国人組織に話したところ、可能性は大きい。来年、三重でSHGシステムができるでしょう。

お楽しみに！

研修のテーマのひとつであった「住民参加型のプロジェクト」に対し、ソムニードのプロジェクトは「住民参加型」ではなく「ソムニード参加型」であり、「住民主体」ではなく「ソムニード主体」とあるという和田代表の言葉が、今回の研修中でもっとも印象に残った言葉でした。

これまで開発分野において海外で行われているプロジェクトに対し、その存在意義を自分自身きちんとすべては説明できないと感じることの多かった私にとって、このような言葉ではっきりと外部者としての立場を表明された和田さんの言葉は、とても力強いものと思えました。「自分がここでプロジェクトをやらなかったからといって、この社会がなくなるわけではないし、ここで暮らす人々が困るわけでもない。問題解決は、社会の内部からだけでも可能である。それなのに、なぜ我々はわざわざここに来るのか。」この問いに対する答は、人それぞれに違ったものでありうるのだろうと感じますが、このように言葉にしてそれを問う姿勢自体が、ソムニードのスタッフのみなさまが、自分自身の主体性にも向

き合いそれを大事にして活動していらっしゃることの表れなのではないかと強く感じました。そのことが最終的に、VVK のプロジェクトに関わる SHG メンバーの方々ひとりひとりの主体性をも大切に、ただ何かを教えてもらう、与えてもらうのではなく、皆で学びあう雰囲気作りにもつながっているのだと感じます。現地スタッフのみなさまがおっしゃっておられたように、はじめから現在のような考え方で活動をなさっていたわけではないことでしたが、私自身も、今後国外のプロジェクトに関わってゆく際には、今回の研修を通して考えた自分自身の立場の意義を、たとえば「偶然の出会いだったから」、というような要素も含め、いつも頭の片隅において活動してゆけたら、と考えています。

一方、現在の自分自身の具体的な仕事の中では、実際に現地のプロジェクトに関わることよりは国内の広報活動に関わることの方が多いので、「相手と同じ視点に立って考え、話す」という点が、今回の研修を通して学んだ、自分の日頃の活動に直接的に影響を与える教訓でした。

ソムニード事務局長の竹内さんのお話からは、いかに国内（特に大都市圏ではない地域）で国際協力活動への理解を広めることが大変か、を学び、また、事前資料として配られた「PCUR-Link だより」の、会話を多用した文面からは、「読む気にさせる」報告とはどのようなものか、を学びました。また、ビジャカパトナムでの SHG 訪問の際には、「研修中の禁止用語」を使って訪問理由の説明をしようとした私に対して原さんから、「なんのことだか分からないって。SHG のオバチャンたちに分かる言葉を使って自己紹介して」との指摘が飛び、そこでも、伝える言葉の大切さを知ることとなりました。

研修をおえた今、やっていることをそのまま言葉にすれば理解してもらえるのが当たり前、なのではなく、伝える相手の立場に立ち、分かりやすく、また親しみやすい方法や手段を使って伝えてゆくことの重要性を身をもって感じています。このことは、開発分野でプロジェクト内容を発信してゆく場面だけに限らず、あらゆる活動においてそのメッセージを伝えるときに重要なことであると思います。研修の最終日に和田さんがおっしゃっていた、「プロジェクトのステークホルダーは、スタッフ、現地の人々に加え、JICA スタッフ、寄付者、団体の会員を含む、そこに関わっている人全員である」という言葉も忘れることなく、関わっている人々全員がきちんと情報共有を行えるよう、そして、さらにより多くの人にメッセージが伝わるよう、自分が関わっている活動に関する情報を発信してゆくことを務めてゆきたいと考えています。

ビジャカパトナムでのセルフヘルプグループの活動支援という限定された内容ながら、今回の研修に関わってくださったみなさまのお話の奥の深さゆえにこのように広がりを持ったテーマについて考えることのできたこの機会は、自分自身にとって大きな意義のある研修となりました。これからもこの経験をいかして自分自身活動してゆきたいと思うと同時に、同じような学習の場が今後も続いてゆくことを願っています。

過去、JICA 及び NGO、NPO の研修に触れたことはない。私が NPO・インド福祉村協会に参加したのも、まだ、3年前のことである。それまでは、このような活動があることは知っていたが、無縁の世界であった。

医療という、狭い世界で生活してきており、退職後は農業を営んでいる。医食同源（生活の実体はそうではないが）の農業生活を今は過ごしている。医療とはかけ離れつつも、意識の中では医療的な生活を過ごしてきた。元上司から、NPO を手伝って欲しいとの声が掛かり事務的な仕

事を引き受けるつもりで参加した。ところが、意に反してと言うか、インドまで出かけるようなことになってしまった。

なんと言っても、最大の難関は英語が喋れないことであつた。しかし、インドに行くことになり、英語の特訓中であり、いい刺激にはなっている。また、こうした活動に参加することにより、今まで以上に多くの人に触れ合うことは格別の物がある。

今回の研修に参加し、一番の勉強になったことは、現地で活動するソムニードの姿勢、考え方であつた。NGO、NPO は「何とか役に立ちたい」と言う思いこみが強く、とかく現地の人たちとの意識の上ですれ違が多いとも聞いた。ソムニードはこれらの反省に立ち、現地の人たちが自らの意志で自らの生活を守るという活動を続けていることに、感銘した。

私が所属するインド福祉村協会も、JICA 草の根支援で今年から「保健衛生」の活動を始める。現在インド政府の認可を待っているところである。「金の切れ目が、縁の切れ目」にならないように、現地の人たちが、本当に何を望み、何をしたいのかを、よく考え、よく聞いてみたい。

私が所属するインド福祉村協会も、JICA 草の根支援で今年から「保健衛生」の活動を始める。現在インド政府の認可を待っているところである。「金の切れ目が、縁の切れ目」にならないように、現地の人たちが、本当に何を望み、何をしたいのかを、よく考え、よく聞いてみたい。

現地に設立した「アーナンダ病院」も 9 年目を迎え、患者も増え診療活動も定着している。地域の保険衛生状態を改善し、より一層の健康で豊かな生活が過ごせるように今後とも活動を進めたいと思っている。「草の根から木の根に、そして心の根」に繋がられるよ

インド福祉村病院（現地名 アーナンダ病院）
開院9年目…躍動の年
クシナガラ（北インド・UP州）

開院8周年 2006年（平成18年）度は21、000名の患者が受診に訪れ8年間で16万人のインドの人々に貢献できました。日本の多くの方々の支援のたまものと深く感謝しております。近年日本とインドの関係はより深まっており、更に友好関係に役立つことを期待して努力しております。

2006年は秋に看護師長、スイテイ・エリザベスが不慮の交通事故死と病院としては大きな事件でしたが、ドクターはじめ全スタッフの努力で歩み発展しております。

9年目は、よりよき希望の「保健衛生教育と人材育成」がJICA草の根支援の協力のもとで本格的に開始されます。

インドの村民、婦人、子供達の衛生的な生活向上に貢献できるものと期待しております。

更なるご支援、ご協力をお願い申し上げます。

（スイテイ エリザベス）

（アーナンダ病院 正面 西側）

う、今回の研修を生かしていきたい。最後に、2006年秋に不慮の事故死で亡くなった Sweety 看護師を偲びつつ、会報の一部を掲載し筆を置きたい。

JICA インド事務所 NGO デスクコーディネーター 佐々木 結
--

1. 人との対話の仕方（対等な関係）

ソムニードの職員と行動をともにするなかで、最後まで注意され続けたのが「対等な関係」を築くためのきわめて基礎的なマナーだった。相手に質問をする前に自己紹介し、質問する場合もその意図を自分の経験に基づきわかりやすく説明すること。見学させてもらったら、それを受けて自分がどう思ったのか、必ず相手にフィードバックすること。いきなり自己紹介もなしに立て続けに質問し、聞きっぱなしでその場を去るなど、失礼極まりないということだ。確かにそのとおり、自分が質問を受ける同じ立場にあれば、そういう相手に対し失礼だと思うだろうし、そうなるとその後の信頼関係確立など問題外、ということになるだろう。基本的な姿勢の問題を確認するいい機会であった。

2. 知識を確実に移転、内在化させる仕組み

金銭出納帳の記入の仕方を単に一握りの研修対象者にのみ「伝授」するのではなく、その知識をさらに別の SHG メンバーに伝えてもらうことによって、さらに個人の知識は深まり、結果的に女性たちの自立、エンパワメントにつながる。他者に伝え、教えることを前提に研修を受けることは、参加者の意識や気合の入れ方に大きな変化をもたらすことと思われる。それが自分たちの経済的自立にもつながるとの認識があるからなおさらである。

翻って、周囲に見られる数多くの研修のうち、こうした知識を確実に移転、内在化させる仕組みを意識してプログラムされているものがどれだけあるだろうか。研修の内容等により限界もあるのかもしれないが、こうした仕組みづくりがあることでその成果と持続性に大きな差が生じることは認識する必要があるだろう。

3. 「参加」できない農業労働者世帯への応用は？

一方、ソムニード、VVK の取り組みが成功を収めているがためにいつそう心に残ったのが、この成果をどうしたら農村の最貧層に応用することができるだろうか、という問題である。マイクロファイナンスの手法はその可能性が大きく期待される一方で、さまざまな問題点が指摘されており、そうした問題点の多くを時間をかけても着実に克服しようとするところにソムニード、VVK の取り組みの強みがある。しかし、農村の土地なし農業労働者で、夫婦共働きで生計を立てているような最貧層は、定期的かつ確実な現金収入がなく、また村民集会などの会合に出かけることで失われる機会費用があまりに高く、「参加」する機会を奪われていることが多い。したがって SHG の会合に参加し、月々定額を貯金す

ることも難しい。また、近年警鐘が鳴らされている小規模土地持ち農民の自殺の増加も、単なる「自助努力」を強調しすぎることの限界を指摘するものであろう。

その点で、VVK が今後農村部の SHG と連携していくことの意味は非常に大きい。これまでの活動により「自立」を果たした女性たちが、より経済的社会的に脆弱な立場にある他者をも含めて活動の幅を広げることができるのかどうか、そうであればどのような連携が可能なのか。今後の VVK の行方は、私たちが日常持つ問題意識にヒントを与えてくれるものでもあり、注目している。

特定非営利活動法人 タランガ・フレンドシップ・グループ 日置雅夫

現地（ビシャカパトナム）での研修の最終日に、原康子プロジェクト・マネージャーよりレポートの提出を言われ、次のような文章を書きました。

『現在のところ頭の中が混乱しており、文章にすることが困難な状況です。

- ① スラムのおばちゃんのやる気をどうやって引き出すのか。物事を合理的に考える習慣をどうやって身に付けてもらうか。本来のあるべき姿をどうやって理解してもらうか。これらのことについて直接答えを教えるのではなくどうやって自分のものにしてもらうのか。
- ② 何を言わないといけないのか。何を言ってはいけないのか。
- ③ スラムのおばちゃんが経済的に自立するのに何が必要なのか。

これら（①～③）の疑問についての答えをソムニードがすでに共有していると考えました。ありがとうございます。

スリランカにおける TFG プロジェクトでは、コーディネーターとしての役割を担うつもりでしたが、修正することを今考えています。』

現在私は、一宮市市民活動支援センターでボランティアスタッフとして週 1 回働いています。普通の人がボランティアをする持続可能な仕組み（システム）を作りたいと思い、約 3 年間努力してきました。今回、ソムニードの活動をみて、私が望んでいたのは一宮地区のコミュニティ開発であることを理解しました。市民の社会的自立を基本とする活動を望んでいます。

TFG は、スリランカで低開発村の若者のための職業訓練を支援しています。若者が経済的自立手段を獲得することで貧困をなくそうと考え、活動しています。7 月ごろから草の根技術協力事業が動き始めます。しかし、初めてのことであり、具体的に何をするのか、イメージが思いつかない状態でした。今回の研修に参加し、いろいろなアイデアをもらうことができました。

- ① TFG 研修生による親睦団体の設立を計画しており、彼らの自主的な運営について TFG

が協力する。なお、手助けしすぎることには注意する。

- ② TFG スリランカレターを月 1 回発行する。関係者に広く配布する。
- ③ 関係者参加による定期的な会合を開催する。
- ④ 販売ネットワーク構築事業に参加するスリランカ人の自立的経済活動を尊重する。作物の選定や共同出荷に関するルールづくりにスリランカ人が自発的に取組む方針とする。

以上いくつかの案を実行に移したいと考えています。私にとって、今回の研修は時期的にも内容的にもちょうど良い研修となりました。

JICA 地球ひろば 稲生 俊貴

本研修に同行することで現地の NGO の活動を直接見ることができ、現地の人々と直接話しをすることができた。やはり現場特有の活気は非現実的で閉塞的なオフィスワークでは決して得ることが出来ない現実感がある。しかしながら、いつ、どこにおいてもそのようなケースの場合、現地に佇んでも相手は初対面の人物には本音を語らないものである。訪問させていただいたプロジェクトにおいてもそれは想定されていた。ただ単に「見るだけ」であるならばきっと得るものは少ないものであっただろう。いかに本音を聞きだすか？インタビューの方法については考えるところがあった。しかしながらその短い現場での接触の時間、また、その場所にたどり着く間にも、言葉を交わすのみならず多くの収穫を得ることができるものであることが研修の当初に提案されていた。

VVK 現地事務所を訪ねた初日、そこでのオリエンテーションにおいて「禁止用語」の提示と幾つかのワークショップを行った。「禁止用語」については参加者に少なからず混乱を与え考えさせられるものだった。しかしながら現地滞在中その禁止用語を発する者は居なかった（と、思う）。この業界に浸かっている限りは業務遂行上非常に便利な言葉ではあるが、現地に住む人々にとっては全く理解出来ないものなのだ。実際現地の人々の理解を得るためには 80 歳のお婆ちゃんに語りかけるようにしなければならないことを理解した。用意していたインタビューの設問は儂くも崩れ去った。

しかし、ワークショップのひとつに飛行場に到着してからホテルに着くまで見かけた人々の職業をできる限り書き出すというテーマが設定されていた。いかに注意深く観察することでさらに多くの情報を引き出すかが問われていたのだ。この、「観察」には技術力が要求されるものであるが、現場で、あるいは車中で、漫然と時を過ごすことは時間の浪費であるということに改めて気づかされた。そして、同じ視点で同じ言葉で語りかけたことで私達は必要最小限なものを持ち帰ることが出来たのであろうか。

さて、今回は今までの多くの海外出張と異なり本来の仕事と研修への参加と 2 つの役割を担うこととなった。両方の立場を両立し、その要領を得ることは難しいものであった。し

かしながら少なからず収穫を得ることが出来たのは、コースリーダーとして研修をリード、フォローしていただいた長畑さんの尽力の賜物であり感謝いたします。また、本研修を実施するにあたり、諸般の事情から準備期間が非常に限られたものとなっしまい、多くの関係者に多大な負担をおかけしたことについて、この場を借りてお礼いたします。

コースリーダーとソムニードからのメッセージ



研修の様子

第3章 コースリーダーとソムニードからのメッセージ

3-1 コースリーダーからのメッセージ

長畑 誠

(いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク)

今回の研修は、私にとっても、自分のこれまでの活動を振り返り、今後について考える、いい機会になりました。ソムニードの和田代表がビジャカパトナムで強調されていた、「現場から考えること」の大切さ。それをとって痛感しました。「スラム」と一言でいっても、それがどういうところなのか、どんな人が住んでいるのか、その人たちは日々どのような暮らしをしているのか、そしてどんな楽しみや悩みがあるのか……。ステレオタイプ的な見方や「先入観」ではなく、まずはそこに生きる人々の「リアリティ」を掴むこと。それは、「外部者」としてそこに関わろうとする我々が、まず最初にしなければいけないことでしょう。そして関わっている間、常に肝に銘じておかななくてはいけないこと、それが「現場から考える」ということだと思います。

では現場をいかに知るのか。和田さんが最初のセッションで伝えようとしていた、「想像すること」「観察すること」そして「インタビューすること」。これに「既存資料に目を通すこと」を加えて、4つのやり方があるでしょう。ただ、その中でも「観察」と「インタビュー」には、それなりのコツというか、技術が必要だと思います。特に「インタビュー」というのは、質問する人自身のあり方が問われることでもあります。

そこに関わろうとする、あなたは何者なのか。なぜそこに関わろうとするのか。あなたはそこに生きる人々にとって、何なのか。インタビューや対話、話し合いといった形で地域の人々と関わることで、あなた自身が問われることとなります。そして、そこであなたが「外から援助を持ち込む人」「外から何かを押しつけようとする人」ではなく、「そこに住む人たち自身の自主的自立的な動きを支援しようとする」ファシリテーターになりたいなら、あなた自身について、地域の人々にわかってもらう必要があります。そしてそのためには、「同じ目線にたつ」ことが重要、というのが、和田さんや原さんが強調されていた、もう一つの大事な点だと思います。

「よく途上国で村の人たちに対して自己紹介も何もしない、『あなたの名前は何ですか、どういう仕事をしていますか、将来の夢は何ですか』と訊く人がいます。同じことを日本で外人さんからやられてみたら、どう思うだろうか」

和田さんのこの問いかけは、外国からやってきて「援助」という形でその地域に関わろうとする我々の、自己意識や他者との関係性のあり方について深い自省を促しています。相手こそがこの地域で主人公として動いていくべき人たちであり、外部者・外国人としての自分は、そこに何らかの意図をもって「参加させてもらう」側の人間。だから、相手のことを尊重し、自分がどういう人間で、なぜここに居るのか、をわかってもらうことが、最初にするべきことなのでしょう。そして、相手の文化や歴史を尊重し、全ての人々がもつ潜在可能性を信じながら、同じ課題をもつ人間の一人として、関わり続けていく。こうした姿勢が求められているのでしょうかね。

今回の研修に日本から参加された皆さんは、とても「ピュア」な方々だったと思います。それは、私のように開発援助業界に変に「毒されていない」という面です。なので、上で述べたようなことは、和田さんや原さんのお話しを通じて、皆さんの心にすっと入っていったのではないのでしょうか。これからも、一人の人間として、同じ世界に住み課題を共有する市民として、途上国の人々とおつきあいを続け、対等でお互いに刺激しあい、学びあえる関係を築いていかれることを信じています。

最後に皆さんにぜひ考えていただきたいのは、「日本社会へのフィードバック」です。少子高齢化、過疎化、格差の拡大、治安、教育問題等々、いま日本社会はたいへんな問題を抱えています。それは、明治維新以降、特に昭和の高度経済成長以降、多くの日本人が一致して目指してきた価値そのものが、問い直されていることでもあります。私たちはこれから、どういう社会を目指すのか。行政と企業だけで社会が成り立つ時代は終わりつつあります。昔ながらの伝統的な地域共同体は崩壊の危機をむかえ、私たちの拠り所はいったいどこなのか、まだまだ見えてきていません。ボランティア活動、NPO活動が新しい形のコミュニティとして立ち上がってきていますが、それもまだこれからです。

途上国の地元で頑張る人々と、日本の地域の人々が出会い、お互いに刺激しあい、学びあう。それによって、それぞれの地域で自分たち自身の地元を創っていく活動がより活性化し深化する。そんなダイナミズムが生み出されることを願っています。私は「あいあいネット」を通じてそんな動きを少しでも生み出させれば、と思っていますが、皆さんもぜひ、途上国での活動を通して、「日本社会をどうしていくのか」についても発信していただければ幸いです。

最後に、この研修の実施に様々な形でご尽力いただいたソムニードの皆さん、JICA インド事務所 NGO 連携担当の方々、それに事務局役の JICA 地球ひろばの皆さん、どうもありがとうございました。そして何よりも、積極的に研修を一緒に作り上げた参加者の皆さん、本当にお疲れさまでした。またどこかでお会いしましょう。

3-2 ソムニード国内事務所からのメッセージ

NGO スタッフ研修の受け入れに関する感想

特定非営利活動法人 ソムニード
事務局長 竹内ゆみ子

今回の研修は、受け入れに至った経緯が、大変急であったため事業そのものの概要もわからないまま JICA 地球ひろばの担当者から実務的な話を聞くことになった。電話での話しがあつてすぐ担当者本人が高山に来られて顔を見ながら話しができたことが、引き受ける上での大きな要因になった。やはり、人と人が顔を合わせて話しをするということの意味は大きい。急なことで先方もせつば詰まっていたとは思いますが、台所事情の難しい NGO としては、常に東京へ呼び出されての打ち合わせが、当たり前になっている状況で、この担当者の最初の行動は、すなおに評価したい。

とりあえず、受け入れ可能かどうかという実務的な面での調整から始まった。年度末の忙しいときであり、インドとのやりとり、日程調整、招聘手続き作成など、受け入れのための準備に取られた。今思い起こすとなぜ断らなかつたのかと思うほど、忙しい時期だったが、「他の NGO 関係者に直接ソムニードのプロジェクト現場を知ってもらうことはチャンスだ」という代表理事の言葉が、前に進む原動力になっていたようだ。

精算業務に関しては、いろいろ感じた。最終的な振り込み方法が、各部署に分かれて複雑だったことも会計担当者にとっては、とまどいが大きかった。

受け入れ事業の中で予定講義時間の変更は良くあることだが、実際の講義終了時点で、講義者と JICA 担当者が、お互いに計画書をチェックして時間の確認をしあうことをしてはどうだろう。現場に付き添っている JICA 担当者が、現場で確認をするということではできないものなのだろうか。

小さな金額であっても簡単な確定金額の通知をして頂けるとありがたかった。年度をまたいだ事業だったため、講師謝金額が決まった時点で、未収金としての計上金額に関わるためである。

また、スタッフの時間的拘束、いわゆる管理費に当たる経費がいっさい認められないのは、苦しいものがあつた。

事前研修に関して、国内事業を行う立場でソムニードの事業に対する考え方、そして行政との連携について説明をした。これまで都会の NGO に話しをする時には、田舎にある NGO としての立場を、地域での信頼作りという観点から説明し、驚かれることが多かつた。しかし、今回の参加者は、地方からの参加が多かつたためか、地域での信頼作りについては、かなりの部分共感されるところがあつたようである。正直、拍子抜けするほど、おとなしくまじめな研修生だと感じた。

事前研修で何を伝えるかということは、参加者によって前提が大きく変わる。海外研修出発直前に2日間の研修をしたが、これがもう少し前に行われた方がよかったのではないかと思った。インドでの受け入れ担当に研修状況を報告する時間もないままに、送り出してしまったことが、私自身の反省点である。

3-3 ソムニード・インドからのメッセージ

NGO スタッフ研修の一行を受け入れて

ソムニード・インド（ビジャカパトナム）

和田信明・原康子・前川香子

<参加者の皆さんへ>

JICA 草の根を通じたパートナーシップづくり

今回、参加者の皆さんのほとんどは、これから各団体で、JICA との連携を含めた具体的な活動を担っていかれる方ばかりでした。こうした方々と具体的に JICA との連携について議論ができる機会を得たことは非常にありがたいと感じております。また皆さんから研修最終日にいただいた貴重なコメントは、ソムニードがスラムの女性、そして JICA 中部国際センター、JICA インド事務所をパートナーとして、2004 年から実施してきた草の根技術協力事業に対して、非常に勇気づけられるものでした。参加者の皆さんからいただいたコメント「スラムの女性たちとソムニードとの対等な関係づくりの実践」などは、ソムニードのスタッフ、そしてカウンターパートのスラムの女性たちによる信頼関係づくりをご理解していただいたもので、大変ありがたく思っております。また参加者の皆さんの中には、今後、JICA とのパートナーシップのみでなく、これまで関わってこられた各国の NGO との関係性を振り返ることを始められた方もいらっしゃり、その真摯で謙虚な行動に、私たちも多くを学ぶことができました。

NGO にとっての「JICA との連携」

「自分たち(NGO)の強みは何か」、「自分たちだけで出来ることは何か」を理解し、その上で「JICA の強みは何か」、「JICA と連携することで達成できることは何か」を考えて、はじめて「JICA との連携」が議論できるのだと思います。インドでの研修中、あるスラムで住民が力を合わせて、自分たちで調達できるだけの人やお金で「スラムの集会場」を建設した、という事実を知った参加者の 1 人の方がいらっしゃいました。その方が「まずは政府にあれをしてくれ、これをして、と要求するのではなく、自分で出来ることを出来るだけの人やお金でやればいいんだということを教えられた」と語ってくださいました。その方のコメントこそが「JICA と NGO との連携」を考える上での出発点だと思いました。

<JICA へのコメント>

スラムの女性たちが講師

現在進行中の草の根技術協力事業で、実際にソムニードがカウンターパートとして一緒に活動しているスラムの女性たちに対して、「日当」や「交通費」ではなく「講師料」を支払っていただけたことは大変、感謝しております。スラムの女性たちを「受益者」としてではなく、事業のパートナーであること、すなわち、JICA の草の根技術協力を通じて、彼女たちが 3 年間で身につけたマイクロ・ファイナンス、組織運営の技術や知識を認めてくださったこと、今回の研修で参加者を対象に講義をした彼女たちを「講師」として認めていただいたことは、非常に画期的なことだったと思います。

受入にあたって事前の合意の必要性

ソムニードでも、研修の準備を開始した後に気づいたことですので、今後こうした研修を NGO に委託される際には、「委託合意書」という書面での手続きをご検討いただければ、と思っております。なぜ、こうした事前の合意書の必要性を感じたかと申しますと、例えば、経費積算に関して、委託団体（ソムニード）の要望を最初に聞いてくださったのはありがたかったのですが、費目や予算設定に関する JICA のガイドラインをいただけていない状態だったので、ソムニードのガイドラインにのみ基づいて経費積算しました。その後、双方のやりとりが十分でない中で予算額が上下したため、混乱が生まれました。もちろん今回、JICA がソムニードを単なる「研修の受け入れ団体」、「研修場所の提供団体」という、いわば「下請け業者」的に扱っておられないことは十分承知しておりますが、お互いの合意文書を取り交わして、双方が対等の立場で物事を進めていくことの重要性を痛感しています。

JICA にとっての「NGO との連携」とは

今回のテーマであった「NGO との連携」はすばらしいテーマだと思いますが、NGO 側に「何が連携をするために必要ですか」という問いかけばかりで、「なぜ JICA は連携を必要とするのか」という部分が、一貫して曖昧なままで、研修全体が進んでいったと感じます。もっとも参加者の皆さんへのコメントにも記載しましたが、同じことは NGO に対しても当てはまり、「なぜ NGO は JICA と連携を必要とするのか」、「連携しなければどうしても達成できないことはあるのか」という問いかけに、自問も含めて、今後とも答えていくことが「JICA と NGO との連携」を考えるベースになると思います。

研修への JICA スタッフの随行

同研修に随行された JICA スタッフの方は、大変ご苦労されたことと思います。「引率者である責任」や「研修資金提供団体の責任」という側面を参加者に対して全面的に押しつけることなく、自分も参加者の 1 人として、ご自分の意見を述べ、研修に参加してくださ

ったのは今後、同様の研修を実施され、JICA スタッフが NGO 職員と一緒に研修に参加される上で、非常にプラスだったと感じます。